氏　　名　　宮　島　　誠

所属学校　　茨城県立藤代高等学校

担当教科　　英　　語

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

(1)　タイという東南アジアの一つの国の視察をとおして、日本がアジアの一員としてどのように関わっているのかを確かめたかった。

(2)　英語教師としてタイ国での英語教育の現状をこの目で見たかった。

(3)　援助の実状だけでなく実際その国に暮らす人々の日常生活を垣間見ることができればと思った。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

認識不足もはなはだしく恥ずかしいことだが、協力活動現場という言葉から私自身がまず最初に連想したのは、汗と埃にまみれて最貧国で働く若者の姿という短絡的なものであった。今回はタイという文字どおり経済発展の最途上にある国での援助協力の視察であったので、だいぶ想像していたものとは異なっていた。しかし、初期の段階の基礎的な援助・協力を終えてある程度の発展を遂げた国であるタイへの、いわば第二段階での援助・協力のありようを視察できたことは、私自身にとって最大の収穫であった。

(2)　疑問に思ったこと

さらなる発展をめざす国への援助・協力のありさまを視察するという点からすればタイは研修地として最適であった。今回の視察で訪れた研究所等を見ると、どの施設も高い水準にあり、その十分な活用が望まれていた。このためにはプロジェクトという体制の中でもっと多くの日本人スタッフが必要ではないだろうか。同時にタイ国自身の自助努力を促すためには、日本人スタッフが引き揚げ、タイ人研究者や技術者の自立が必要であろう。このジレンマをどう解決して行くのかが疑問として残った。

３．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

東京にいるのかと錯覚させられるほど林立するバンコクの高層ビル群。どこに行っても目につく建築中のビルや道路。溢れかえるほど多くの車。タイ国はまさしく発展途上にある国との印象を強く持った。ところが一方では電気もないようなスラム街をあちこちに見た。しかもこの数は年々増加の傾向にあるという。急激な経済発展にともなうこの貧富の差の拡大はタイ国経済の大きな歪みである。天を突く高層ビルとスラム街の存在は途上国の持つ「明」と「暗」をみごとに表している。この実状を見ると、日本を含め多くの先進国の行なっている援助が、一部の限られた人々のものではなく、最底辺に暮らす人々まで行き渡るまでにはかなりの時間が必要であると痛感させられた。今回の視察をとおして「援助」というたった一つの言葉から多くのことを考えさせられた。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

今回の視察においてビデオを持参し、自分が興味を持ったものを手当たり次第に撮影した。これを編集し機会あるごとに生徒たちに見せたいと思う。また、英語の教科書の中にも自然環境問題や途上国の問題を扱う項目があるので、そのたびに自分が見たままを自然な形で生徒に話し、それらの問題をともに考えたい。

５．所感および意見

(1) 研修時期および期間

研修は８月21日から30日と、夏休みの最後の日程で行なわれた。学校現場に復帰してから自分のペースに戻るのに１週間程度は必要なので、あと１日でも２日でも早い出発と帰国の日程が望ましい。10日間という研修期間はちょうど良いと思った。

(2) 研修日程および訪問国

タイの気候およびバンコクの交通事情を考えると、１日に１～２箇所という今回の施設訪問の回数は適当であった。

当初予定されていたネパール国訪問が国内の政情不安のためにできなくなってしまいとても残念であった。しかし、一国をじっくり視察できたという点では良かったのではないかと思う。とくにワットトライミット高等学校を

訪問し、そこでの先生方や生徒たちから受けた心からの歓迎は忘れられないものとなっている。

(3) その他全般的な所感

今や世界の経済大国となった日本は国際社会で多くの期待を寄せられている。その日本が開発途上国で行なっている開発援助計画は実際にはどのような形で進められているのかを、現地で自分自身の目で見ることが、この研修旅行の第一の目的であった。アジア工科大学、チェンマイ教員養成大学、チェンマイ大学工学部等の教育機関を訪問し、生徒を指導している方々に直接お会いすることができた。また国立家畜衛生・生産研究所、環境研究研修センター、ラヨン東部海洋漁業開発研究所（水産資源研究開発機関）等の施設訪問では、プロジェクト方式とよばれる形で行なわれているＪＩＣＡの協力事業の実態について、おぼろげながら知ることができた。

この研修旅行の第二の目的は訪問国の現状を直接視察することであった。けたたましい騒音と大量の排煙を撒き散らしながら疾走する、バンコク市内のオートバイやトゥクトゥクと呼ばれるタクシー。要らないと言ってもそれでもなおいつまでもまとわりついて離れない物売りの人たち。雨が降るたびに冠水した市内の道路。空高くそびえるビル群。穏やかな表情が印象的だったタイの人々。日本に似た郊外の田園風景。タイはさまざまな側面を持っている。タイ国とは？バンコクとは？たった10日間の研修旅行で、これらについて答を見い出すのは不可能である。ある意味でタイ国は混沌そのものである。しかし、機会があればぜひもう一度訪ねてみたいと思うのもタイ国である。はからずも与えられた今回の研修旅行は、私にタイ国という、新しい世界に目を向けさせてくれた。訪問各地でお世話下さったＪＩＣＡの方々、タイ人よりもタイのことを知っておられるガイドの武田さん、遠く日本を離れ援助活動を続けていらっしゃる協力隊員の方々、そして今回私たち24人の教員に同行して常に細かな心配りをして下さった、鈴木さんと稲垣さんに心からお礼申し上げます。

氏　　名　　天　海　玲　子
所属学校　　栃木県立栃木南高等学校
担当教科　　英　　語

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

国際理解教育を推進する私の勤務校では、アジアにも眼を向けようということで、昨年タイからの留学生を一年間受け入れた。日本語を教えたり、広報紙や学校祭でのタイについての紹介、タイ舞踊の披露等、彼女との関わりのなかで私自身もタイへの関心が高まってきたところであったので、今回の研修旅行は大変良い機会となった。特にタイの人々の暮しと教育の現状に重点をおいて視察したいと思った。

世界有数の援助国となった日本――どのように援助が為されているかを、実際にそこで携わっている人、及び現地の人々を通して知りたいと考えた。

2．協力活動現場の視察を通して

各訪問先では、職員の方が、資料と共に援助の概要を説明して下さった。質疑応答では、訪問団も熱心に質問し、時間が短く感じられる程であったが、以下訪問順にそれぞれ、○参考になったこと、○疑問に思った主なことがらを書き出してみよう。

(1)　ＪＩＣＡタイ事務所

タイにおける事業概況の説明により、急速な工業化を遂げているタイが現在直面している深刻な経済、環境問題を始めとして、農業、工業、貿易、インフラ、エネルギー、財政、金融、教育、保健などあらゆる面に渡って山積する問題をどのように解決し、開発を援助していくのかの計画を知ることができた。日本がタイに対してこれ程多方面に渡る多大の援助を行なってきていることは、私には驚きであり、その実現達成の困難と長期間を要するであろうことを推測すると、現場で携わる日本人スタッフの苦労が推察できた。同時にタイの一般の人々は日本の援助について、どの程度知識をもち、どのように感じているのか知りたいものだと思った。

(2) アジア工科大学

アジア諸国から優秀な学生が恵まれた環境で学問出来ること、将来の各国のリーダーと成りうる科学者、技術者が育成されること、20年の歴史と実績があること、学生が非常に意欲的で熱心なので、大変勉強させられること等、藤原教官を始めとする日本人スタッフのお話であった。このような形態の大学が既に存在し、途上国の発展に寄与していることは大変好ましいことであるが、反面高度な技術を修得しても母国では生かせないと、先進国（例えば、日本の企業など）へ流出したり、アカデミックすぎて実際に応用できない場合もあるのではないかとの少々の危惧も感じたことである。

(3) 家畜衛生生産研究所

計画が始まって7年目、タイの畜産に関する現状（疾病、飼料、品質改良、衛生等）を質問も含めてよく説明して下さり、大変興味深いものであった。タイの人々は日本人よりもはるかに多種の肉食であるようで、生活向上と共に牛乳も不足してきているので、輸入牛をタイの風土に合うような強い乳牛に改良する、圧倒的に不足する家畜衛生、畜産要員の養成等、この研究所の役割は重要であると思われる。職員の大多数が女性であるのは、なぜかとの問に、ある女性職員は「男性獣医はフィールドワークの方を好むので……」との答えが返ってきたが、女性にとってこの研究所は働き易い職場であり、全国ネットワークの要となる獣医等の人材育成が急務であろうと感じたことである。

(4) 環境研究研修センター

開発に伴う環境破壊、悪化がどの程度進んでいるかまだ調査研究が、始まったばかりとのこと、日本が無償供与し、最新の機械を備えたタイで唯一の研究所である。自然科学系の学生が圧倒的に少ないせいもあってか、タイ人員の配置がまだ18％程度しか満たされてないこと、機械が故障した場合の修理、部品、付帯設備等の補充が迅速に行なわれるのだろうか。供与した最新の機械を十分に活用できるタイ人スタッフが養成され、自立した機関となるまでの息の長い援助が必要になっているのではないだろうか。

(5) 青年海外協力隊員訪問

高橋さん、飯塚さん共に現地の人々と一緒に生活し情熱をもって仕事にあたっている。いくつかの困難も若さと情熱で克服し、教えるよりも学ぶことが多いと謙虚に述べる様子は大変清々しく、頭が下がる思いであった。日本

のこんなに立派な若者たちの気高い精神と行動を、是非諸外国の人達にも知ってもらいたいと感じたことである。

(6) ラヨン水産資源開発研究所

タイの人々は日本人以上に海産物を食用にするということで、タイ南部開発が漁場に及ぼす影響、新しい水産資源、養殖のマニュアル作り、情報交換が主な仕事とのことであった。南場さん始め3人の専門家の方に話を伺ったが、最も困難なことは何かとの問に対して、調査のための費用、スタッフの不足、日本人とタイ人との違い、ペースが違うことから来る関わり方の難しさ――性格を知り、プライドを尊重しながら付き合うこと――2年程経って、ようやく信頼されるようになる（他国での経験も含めて）。それでもタイは他国と比較すると援助効果は高いのではないか、とのことであった。世界各地で援助活動に当たっている職員の方達の困難や御苦労の偲ばれる言葉であった。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

私は今回が初めて途上国への訪問であった。第1日目にバンコクで王宮や寺院、多数の水上の家やバラックを見てその貧富の差に愕然とした。子供の頃読んだM.トウェインの「王子と乞食」の物語は、私の中では長年に渡って、王子が乞食と服を換えて"冒険"をし、様々な人生経験をするというメルヘンにしか過ぎなかったのであるが、近代的ビル群とバラック、現代の最新の文化を享受する富裕層と無一物の路上の乞食達が同次元に存在するということが、テレビや映画のスクリーンから抜け出して深刻な現実となって私に迫ってきたのである。富の分配の余りにも大きなアンバランスである。しかも、87年以後の高度経済の発展により、所得格差は拡大しているということであった。援助の方法も如何にその格差を縮小するのか、最貧層の人々が経済的に自立し小綺麗なアパート等に居住できるようになるには何年かかるのかといった観点から計られるべきなのではないだろうか。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

(1) 栃木県国際教育研究協議会の発行する「国際教研だより」に発表する。

(2) 同協議会主催の国際理解研究会でスライドを使用して発表する。

(3) 学校での授業の一環にスライドを使用する。

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

適当である。

(2) 研修日程および訪問先

ネパールが中止になり残念であったが、タイのバンコク以外の地域を訪れることができ、タイをよく知るうえでは大変良かった。喧騒、排気ガス、渋滞、汚染の第一印象が、肥沃で素朴、実り豊か、明るく逞しい若い国との印象になったからである。

(3) その他全般的な所感

今回の研修においては、訪問先がバラエティに富み、特に高校、大学訪問では歓待していただき、職員との懇談会が設けられたので、教育に関する情報を直接得ることができ有意義であった。中、高校生の元気で明るい笑顔や、誇りに満ちて勉学に励む大学生の姿が印象的であった。理工学部にも多数の女子学生が学んでいるという話には、なぜ日本では少ないのだろうか、と自問自答せざるをえなかった。

今迄は英語で意志の疎通がはかれる国ばかりを訪問したので、言葉についても色々感ずることがあった。やはり英語が共通語なのか。語学教育も含めて教育水準を上げることが肝要である。公教育は普及してきたとはいえ、タクシーの運転手や店員等の状況から推察すると一般の人々の教育格差は経済格差に応じて大きいようだ。貧困や無知から救う手立てとしては、教育の機会均等を保証することが有効なのではないのかと思った。

もっとよく知るためにはホームステイを取り入れたり、タイ人のスタッフとの対話の機会がもっと取り入れられたら良かった様に思うが、現地に明るい武田さんを始め、稲垣さん、鈴木さんの協力のお蔭で実りある楽しい研修が出来たことを御礼申し上げます。

氏　　名　　浦　部　茂　夫
所属学校　　千葉市立稲毛高等学校
担当教科　　英　　語

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

今回初めてのアジア方面の旅行であったので、素直にアジアの国（タイ）を見て、視野を広げたいというのが私の願いであった。日本のＯＤＡの実態がどうであるか等という大仰なことは発想になかった。一般に、英語教師は英語圏の国々に対する関心は強いが、その他の地域についてはそうではないと言われている。私もその例外ではなかった。従って、正直に言えば、ＪＩＣＡ関係の施設視察は第一の目的ではなかった。

しかし、今回実際にタイを訪れ、観光をしたり、ＪＩＣＡの様々な施設や青年海外協力隊の現場を視察したりすることで、タイという国に対する理解も深まり、自分にとって非常に身近な国になった。これが今回の研修旅行での最大の収穫であったと言える。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

まず、出発前日にオリエンテーションを受け、今まで漠然としていたＯＤＡ及びその中でＪＩＣＡの果たす役割が理解できた。その背景知識がなければ、今回の旅行も単なる物見遊山に終わってしまったことであろう。

対外援助は、金銭や物資という具体的な形を取る場合には分かりやすい。しかし、人的援助となると、日本から派遣された人々がどこで何をしているのか、そのイメージがなかなか湧かない。今度のタイ研修では各研究所や大学等を訪問し、実際にそこで働く日本人専門家や協力隊員の方々にお話を聞き、どのように人的援助が行われているのかがよく分かり、一つの疑問が晴れた。

研修旅行中に７ヵ所訪問したが、その中で特に印象に残ったのは次の２つの教育機関であった。

まず、アジア工科大学である。このような国際機関としての大学院大学の

存在を初めて知った。アジア諸国の秀才を集めて、土木工学その他の学問分野で先進国レベルの教育を与えるということであった。教育面での国際協力がこのような形で実現しているのを知り感動した次第である。

次に、チェンマイ教育大学では日本語教師として活躍する青年海外協力隊員を訪問した。私は将来日本語教師として海外で教えてみたいという希望を持っているので、大変興味深くお話しを聞いた。また、実際に日本語授業を参観し、その教授法を垣間見ることができたのは英語教師として得るところ大であった。

(2) 疑問に思ったこと

何人かの専門家の方々のお話しの中で、日本人とタイ人とでは仕事に対する姿勢が違うので、共同研究も進めにくいとの指摘があった。例えば、日本人は研究の完成のためであれば残業もするが、一方タイ人は勤務終了時間が来ると途中であっても帰宅してしまうとのことだ。通常のプロジェクトでは、ある年限を定めて日本人専門家がカウンターパートに技術指導し、研究者や専門家の育成を図っているとのことだが、彼らが引き揚げた後は本当に所期の目的どおり機能するのかと少し心配である。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

今まで私はタイはもっと貧しい国だと思っていたが、今回のタイへの研修旅行でそれが誤りであることが分かった。バンコクでは、建設中の高速道路や高層ビルが多く見られ、発展の勢いが感じられた。しかし、急激な発展のため、その速度に追いつかない面もある。例えば、交通渋滞やスコール後の市内の道路の冠水など社会基盤の整備では解決しなければならない問題が山積しているようだ。

援助はその国が本当に必要としているものに対してなされなければならない。ある国で立派なオペラハウスを日本の援助で建てたが、一般の人には入場料が高すぎて入れないという話を聞いたことがある。その国で必要とする援助が何であるか十分に調査した上で、我々国民の税金が無駄にならないような援助をしてほしいと強く願う。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

最近の英語教科書には国際ボランティアや対外援助、そして環境問題やアジア諸国に関する文章が以前より多く見られるようになった。今までアジアの国を扱う時は「見て来たような嘘」を言っていたが、今回の研修旅行のお蔭で少しは自信を持って教えられる気がする。また、旅行中に撮ったスライドを使い、私の見たままにタイという国を生徒に紹介していきたい。

もちろん、タイだけを見てアジアの国すべてを理解したとは言えないが、アジアに対する自分の視点が定まったような気がする。言い換えれば、これから私がアジア諸国や対外援助問題等を考えるとき、今回のタイでの経験が出発点になるのである。

５．所感および意見

(1) 研修時期および期間

８月の下旬は、新学期を控えているので日程的にきつかった。７月下旬から８月にかけての日程がよい。期間は10日程度で十分であろう。

(2) 研修日程および訪問先

研修日程については、全体的に計画が良く立てられていたので、短期間で効率良く多くのものを見ることができたと思う。しかし、少し自由研修時間があっても良かったのではないかと思う。夕食はすべて計画に組み込まれていたが、各自が自由に食べる日が何日かあっても良かった。危険な面があるかもしれないが、自分の足で歩く機会があればもっと実りある研修になったと思う。

訪問先としてＪＩＣＡ関係施設が主になるのは研修の目的から考えて仕方ない。しかし、高校教師対象の海外研修であることを考慮にいれて、教育施設をじっくり見学する機会が欲しかった。もう少しタイの教育事情を知りたかった。

(3) その他全般的な所感

現地ガイドの武田さんには大変お世話になり、感謝申し上げたい。お蔭でタイという国に対して大分理解が深まった。やはり、ある国を理解するには実際にその国を訪れるのが一番だと思う。

６．その他

今回の研修旅行でタイという国が好きになった。また、タイ語の響きが心地よく、現地でタイ語学習のためのテキストやテープを購入してきた。今後何とかタイ語をマスターして、再度タイに行きたい。この次は、日本語教師としてタイの人々のために何か貢献できればと考えている。

最後に、今回このような機会を与えてくださいましたＪＩＣＡ並びに研修旅行に同行してくれました稲垣さんと鈴木さんに深く感謝いたしたいと思います。

どうもありがとうございました。

氏　　名　　上　松　信　義
所属学校　　東京都立農産高等学校
担当教科　　農業（教頭）

１．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

①政府開発援助（ＯＤＡ）に対する批判を目にすることもあるので実状を知りたい。

②初めて訪れる国なので、タイの人々の暮らしや文化を知りたい。

③教育に携わる者としてタイの教育事情、生徒の様子、課題等を知りたい。

２．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

①協力活動は容易ではないと思っていたが、現実の厳しさを思い知らされた。

②協力隊員や派遣された専門家の苦労の様子、貢献している様子を理解できた。

③確かな知識・技術があると国や言葉を越えて援助できることを改めて感じた。

(2)　疑問に思ったこと

①施設・設備等、最新・最上級のものが設置されていたが、日本人スタッフが引き上げた後の運営や維持管理が可能なのか不安に感じるところもあった。

②現地の自立を援助するのなら、現地の設備、現地の人の力でできる技術や工夫が中心になってもよいのではとも感じた。

３．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

(1)　途上国の実状

ＪＩＣＡ事務所でタイにおける援助について説明を受けたが、実際に視察して、解決すべき問題が山積していること、我が国の援助が大きな役割を果していること、タイは援助を受けるだけではなく、近隣の国へ援助する力があること、バンコクの激しい交通渋滞に日本車の占める割合が高いなどにつ

いて理解を深めることができた。

(2) 第二次世界大戦後のタイにおける社会情勢の変化や我が国のＯＤＡの実状をみると、過去には問題もあったかと思われるが、援助にかかわる人々の真摯な姿にふれることができて大変よかった。自分にも何かできることがないか考えさせられた。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

タイの人々の暮らし（言葉、食べ物、住居、買い物、交通事情、気候等）は、現地を訪れて知ったことが多く、新鮮な驚きだった。狭い敷地で多数の生徒をかかえるワットトライミット高校や協力隊員が活躍するチェンマイ教員養成大学の視察は、日本が失いかけている教育の姿を見た思いがする。ＰＴＡの広報や朝礼で広く紹介したい。

５．所感および意見

(1) 研修時期および期間

10日は適当な長さだが、中間に自由に行動できる日が半日でもあるとよかった。帰国後、すぐ新学期を迎えるのはきつい。２～３日の猶予がほしい。

(2) 研修日程および訪問先

日程	訪問先	感想
8/21土	成田→バンコク	空港到着後の激しいスコールに雨季を感じた。
22日	バンコク市内観光	運河巡りで見た水の汚れや住宅事情と寺院や王宮の豪華さに違和感を覚えた。
23月	ＪＩＣＡ事務所	タイがかかえる問題の多さ、深刻さと我が国の援助の果たす役割について理解を深めた。
	アジア工科大学	タイのみならず多くの国々の学生が自国の課題に取り組む様子を知ることができた。
24火	ワットトライミット高校	日本では有り得ない教育環境にもかかわらず、正常な教育活動が行われているのに驚いた。

8/24火	国立家畜衛生生産研究所	家畜の姿はあまり見えず、女性の研究員が多かったせいか、研究所らしい緊張感に欠けた。
25水	バンコク→チェンマイ	バンコクにないやすらぎを感じた。
	チェンマイ大学	協力隊員が苦労している様子がうかがえた。同じ立場になったら、どうするだろうかと思った。
	チェンマイ教員養成大学	チェンマイ大学に比較すると施設は劣るが学生の学習意欲と協力隊員の活躍に心を打たれた。
26木	チェンマイ市内観光	市内観光やナイトバザールは興味深く見学したが、日中に自由時間があるとなおよかった。
27金	チェンマイ→バンコク	もう1日ぐらいチェンマイに滞在したかった。
	環境研究研修センター	広大な敷地に一つだけのセンターのたたずまいが、事業の継続性と広がりに不安を感じさせた。
28土	ラヨン水産資源研究所	ラヨンに行く途中の農村や農地、研究所近くの漁村等で少しでも時間がとれるとよかった。
	パタヤ・ラン島	パラセイリングが初めての経験で楽しかった。
29日	バンコク	市内観光は時間的にあまり意味がなかった。
30月	バンコク→成田	機会をつくってタイをまた訪れたい。

(3) その他全般的な所感

ネパールの視察が中止になったのは残念であったが、その分タイに時間をかけることになり、理解を深めることができた。バンコクの交通事情や上下水道のこと、近代的な高層建築とスラムの存在などにタイの課題の深刻さを認識した。援助の実際を含めて生徒や保護者に伝えたい。このような研修の機会をあたえられたことに深く感謝する。

氏　　名　　八　代　四方樹
所属学校　　山梨県立農林高等学校
担当教科　　数　　学

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

「国際協力」といっても漢字の意味でしか内容が理解できていない。そこで何よりも先ず現地の「国際協力」の現場を見学し、その実態を体感する中で偏らない「国際協力」の印象を作り上げることをめざした。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

施設・設備の面では、見学箇所のどれも実に広々とした豊かな自然の中にあり、単に入れ物ということでなく、そこに働く人達が生理面・心理面で最高の状態を保てるように配慮した環境であった。日本の大学などの研究施設の現状が気の毒に感じた。

人的な面では、青年海外協力隊員をはじめ、各分野の専門家の方々が現地にとけ込みながら熱意を持って現場で活躍されていることに感動した。また、人材養成のため研修員として日本に派遣され、帰国後日本の援助施設で役割をはたしている姿に、発展途上国の指導者の自国を思う気持ちの真剣さを感じ取ることができ、このことも今回の研修の大きな成果であったと思う。

若い協力隊員が自らの技術を低いと謙遜しながらも、相手国の人々のためまた、自分自身のために努力していると語ってくれた話を聞いて、援助を完成させるには施設・設備など物質面での充実は欠かせないが、それよりも大切なのは、熱意と相手を思いやる心であると理解した。

(2)　疑問に思ったこと

日程の関係上訪問時間が短いためか、あらかじめセットされた説明に終始し協力活動の生き生きとした現場を見ることはできなかった。間違った認識になっているかも知れないが、その中で感じたのは、第一に前記の人的・物質的な充実の割に長期的に援助の効果が上がっているのかということである。確かにタイ国には膨大な援助がされているが、それらがどのように有機的に

組合わされ、またタイ国自身の発展計画にどう位置づけられているのかという疑問である。発展途上の国々が持っている発展段階のアンバランスとどう調和をとり、援助がどの方向を志向しているのかが見えてこない感じがした。

第二に、専門家や協力隊員の派遣任期が2年では短くないかということである。我々の平凡な日常生活でも2年間はそう長くない。様子のわからない外国でのそれはさらに短いだろう。十分な成果が上がるのだろうか。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

タイ国の印象は豊かな国だということである。緑の沃野という表現そのままの大地である。風土が国民性を作るといわれるが、日本人がこの国に生活していれば勤勉さを国民性として持たなかったかも知れない。ＧＮＰで計れない底の知れない豊かさを感じた。この国には欧米や日本のような工業化（ハイテク技術までの全セット）は不必要かも知れない。確かにこの国にも所得格差での南北問題が存在するから、その解決には早急に取り組まねばならないだろうが、美しい環境を保全しながらの開発援助という視点が必要と感じた。

かつての日本もそうだったが、発展途上国はひとにぎりの豊かな支配層と圧倒的に多い貧しい層とに分かれ、社会の安定にも必要な中間層が、十分に育っていない。一面的な見方かも知れないが、政策も開発援助もともすれば経済的下層階級を犠牲にしがちである。先進国からの援助はこの点に十分配慮すべきと思う。第二にその国の永続的な発展の基礎として人づくりと、またそのための教育の充実が欠かせないが、この面で日本は世界に誇るべき実績をあげている。教育のノウハウを生かして、この一点に援助目的を絞りこんでもいいのではないかとも思う。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

今回の経験を生かして、まずは国際協力に対する興味・関心の喚起を図りながら、長期計画で学校の分掌・組織さらには授業・クラブ活動にも開発教育を取り入れていくべきである。分掌・組織は当面無理でも、生徒のボランティア活動に開発教育を併せてクラブにすれば、すぐにも実現できそうである。その中で援助活動は、人道的な面だけでとらえるのでなく、何より活動する本人の向上や自己発現にもつながることを強調していきたい。

５．所感および意見

(1)　研修時期および期間

夏季休業中の前半がよりよい。今回の日程では２学期が始まってしまった。また、とても言い訳にもならないが、この報告書の作成の余裕もほしい。

(2)　研修日程および訪問先

もう少しじっくりと現場見学をしたい気持ちもあるが、開発途上国段階からもう少しで離陸しそうな国を見学できたのは意義深かった。

(3)　その他全般的な所感

今回の研修に参加して一番楽しかったのは、ＪＩＣＡ・ＪＩＣＥのお二人をはじめ参加者が皆さんすばらしい個性の持ち主だったことです。旅行の間中、昔からの友人と同じ気持ちで接してもらい、また接しました。このメンバーで来年もここに来たいという話を、冗談ではなく私は真剣に検討したこともあるくらいです。団体旅行は人の和が大切だと再確認した旅でした。

氏　　名　　北　原　千　歳
所属学校　　長野県立南安曇農業高等学校
担当教科　　農　　業

１．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

今日の日本は経済大国であり、日々の生活は豊かであるが、かえって精神的には貧困であると言われている。高度情報化社会の中で生きる私たちと、環境が全く異なる開発途上国と言われる国々の実情を見聞し、日本の果たす役割と、今の私達のおかれている現状を再認識する。

２．協力活動現場の視察を通して

今回東南アジアでも比較的経済発展がめざましいタイ王国における協力活動現場を何箇所か視察をした。主な視察場所は、アジア工科大学、ＪＩＣＡ事務所、チェンマイ大学工学部、チェンマイ教員養成大学、国立家畜衛生・生産研究プロジェクト、環境研究研修センター、ラヨン水産資源研究開発プロジェクトなどを視察した。ＪＩＣＡが派遣する専門家や青年海外協力隊員の姿は、まさに誇りと希望に満ちあふれているようで、強い印象を受けた。各自が実施している仕事に対し、あのように情熱的にエネルギーが注げるのも、やはりすばらしい。各プロジェクトをあげれば数かぎりない程多くのものがあり、素人の私などは説明を聞いてもピンとこないものばかりであるが、その国の人々にとっては、重要な事業であると認識した。各プロジェクトには相当なお金がかかるわけだが、国立家畜衛生研究所や環境研究研修センターにある設備はやはり日本の最先端の機器が備えられていた。発展途上の国だから、多少レベルを落としてちょうどよいといった愚かな考えなどは全くなく驚いた。

このような最新の設備にはやはり、最先端の技術が必要であり、熱心に日本的に教えている方々は力強さがある。けれど、夕方の仕事終了時刻になると、一気に出口にかけより帰ろうとする現地の方の姿は、本当に大丈夫だろうかと疑問を感じた。日本側の専門家がいるうちはいいけれど、一定期間が過ぎれば引き上げてしまうわけであり、日本的な価値観では、欲がないように感じられた。

３．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

途上国という言葉を聞くと、何か遅れている暗い国というイメージがわく。そして日本をはじめとする先進国はあたかも大変すばらしい国のように感じられる。けれど、情報が日本のように氾濫していなければ、その人の入手できる情報は限られてしまう。バンコクの街中で物乞いする少年少女や身障者の姿は、一見哀れみをもって見てしまうが、かえって逞しく生き生きしているように感じられたのは私だけだろうか。高速道路沿いの立派な建築物とは対照に、トタン屋根もしくはもっと簡単な住居に住んでいるような人々もいる。又街にあふれているひまそうな人々は仕事をもっているのだろうかとも疑問を持ってしまう。その他運河沿いに生きる人々。日本の一般的な価値意識をもってみると、異国情緒あふれるといえばそうであるが、なんとなく遅れているようにも感じられる。運河の汚れから公害を中心とする環境問題が気になるが、実際今の現状はそれどころではなく、日本の経済発展の反省点を生かす場もなく、進んでいるようだ。上下水道の区別がないのは悲惨に見えるが、現地の人々はあまり気にしていないのも、私達の価値観の方が違っているのだろうか。今日本は経済的には大変恵まれ、いよいよＯＤＡの金額はアメリカよりも多いと聞く。確信はできないが、国と国との格差の拡大は日本の経済発展と比例しているのではないだろうか。事実海老などかつての高級品がこんなに気軽に食べられるようになって、そう何年も経過していない。家具店へ行けば、安い立派な組み立て式のものもあるが、よく見れば東南アジアからの輸入ものと理解できる。私達は発展途上国の人々の犠牲のうえに成り立っているといっても過言ではない。このように格差が大きくなってしまったのも、先進国が弱い国からの搾取をした結果ではないだろうか。そう考えた場合、日本は多額の援助をしても不思議ではないし、人的な部分の援助も重要になる。特に今回の視察で、人的な部分の援助はいかに強靭な精神力と大きな目的や意義が理解できている人でないと不可能であると痛感した。熱帯地方は、夕方になるとすごいスコールが降り、道に水が溢れる。もちろん高温多湿の環境下での仕事なので、一層大変である。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

農業的な部分について直接視察したわけではないが、間接的に理解できた部分もある。発展途上国は農業に力を注いでいると思っていたが、そうともいえ

ない。やはりどの国も経済発展により豊かな生活をしたいという願望が存在する。タイは熱帯作物や果樹栽培が盛んであり、当然稲作もある。そのような農業的な部分から、発展途上国について理解を深めるのも一例ではないだろうか。

5．所感および意見

今回協力活動現場の他に地元高校との交流があった。日本でいえば都内の高校に該当するワットトライミット高校である。学校中生徒があふれるといった感じであったが、彼らの学習姿勢はすばらしかった。

当初はネパールへ行けると楽しみにしていたが、予定が変更になった。これもやはり発展途上国らしさであると認識した。

旅費等を負担してもらったわけであるが、やはり今や多くの日本人が海外渡航する時代の中で、今回のような研修時期等は妥当と思われる。最後にいろいろ大名旅行の如く、至れり尽くせりの設定を組んで頂いたＪＩＣＡの関係の皆様方に対し、心より感謝の意を表したい。

氏　　名　　小　島　隆　彦
所属学校　　富山県立伏木高等学校
担当教科　　国　　語

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

今日の日本の経済的繁栄が、欧米諸国のみならず、多くアジアや第三世界に依拠するだけに、私達日本人はもっとアジアや第三世界の国々への理解や関心を深めねばならない。

今回のタイ視察で、特に主眼をおいた点は下記の通りである。

(1) 日本のＯＤＡが、タイのどのような分野に使われ、現地の発展にどのように役立っているのか。

(2) アジアの国々から、日本はどのような役割や支援を求められているのか。

(3) タイの国情や文化の一端を知る。

2．協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

今回の視察で、日本の援助によって建てられた多くの研究所、大学等を見ることができた。これらの諸施設では各分野の研究及び研究者の指導・養成が行われており、人材育成に日本が多大な貢献をしていることを知ることができた。

また、若い人達ばかりでなく、地方公共団体の機関から派遣された何人もの専門家が研究指導に当たられ、現地の人々との人間的交流を深めておられる姿にとても感動した。

技術指導を通して国際貢献に進んで協力できる若者を育成していくことが、今後の教育の大きな課題の一つであると考えさせられた。

(2) 疑問に思ったこと

日本が建てた諸施設はいずれも立派なものであった。視察した施設の中には、数年後には日本人スタッフが引き上げてしまうというものもあった。日本人スタッフが引き上げた後、施設は従来通り研究活動が維持できるのだろうかという疑問を感じた。また、研究活動が現地の人々の生活の上にどのよう

な形で反映されているのだろうかとも思った。現地の人々の生活の向上に直接結びついた施設と人材の派遣といったものも必要なのではないかと感じた。

青年海外協力隊員の方々の帰国後の就職も多少気がかりになった。日本の企業や諸官庁に青年海外協力隊員のような経験を持つ青年を率先して採用する制度があれば、若者による国際貢献もいっそう高まるのではないかと思う。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

タイの現状は、私の抱いていたイメージとは裏腹に著しい経済発展を遂げていた。バンコク市内の至る所で目にする外国製品の広告塔、マンションの大きな看板、建築中の高層ビル等が経済の発展を如実に物語っていた。

しかし、その一方で人口集中に伴う、運河沿いや高層ビルを背景にしたスラム街、交通渋滞が今日のタイの現実を象徴しているように思えた。

日本の経済援助が間接的に都市と地方との格差、都市問題、環境問題等を招いたとも言える。

従って、今後日本は地方振興のための農業水産等の産業奨励・技術指導、環境問題改善、公衆衛生・医療活動、留学生を積極的に受け入れる教育などへの援助や施策を行う必要があるのではなかろうか。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

今後、国際協力、国際理解の必要性と大切さを説いていきたいと思う。具体的には、

- 日本の援助により建てられた研究施設、大学等を写真展示する。
- 上記施設で指導する日本人協力隊員の姿を写真展示する。
- スライドを使って、研修内容を生徒に話し、国際協力の必要性を説く。
- 本校の国際理解デーに県内在住のタイ人やその他のアジア人を招き、講演及び対話を通してアジアへの理解・認識を深めさせる。

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

タイへの視察研修は、夏休みの後半に10日間の予定で実施された。時期、期間ともに適当であった。

(2) 研修日程および訪問先

訪問先は国立の各種研究所を始めとし、大学、高校等変化に富み、研修は有意義であった。研修日程も適当であった。

(3) その他全般的な所感

今回の研修は、敬虔な仏教国だが、経済的には貧しいのではないかというタイに対する私のイメージを一変させるものとなった。そして、何よりも国際協力と人的交流の大切さを私に教えてくれた。

自ら進んで海外に赴き、現地の人々と共に研究や技術指導に当っておられる協力隊員の生き生きした姿・表情が忘れられない。

人間として何をすることが、人間としての価値を高めることになるのか。国際理解を深めていくには何が本当に必要なのか。そして、これからの教育には、開発教育（国際理解教育）の重要性を大きく位置づけていかねばならないことなど、今回の研修を通して私は深く考えさせられた。

本当にすばらしい研修に参加させていただくことができましたことを、ＪＩＣＡの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

氏　　名　　山　内　和　幸
所属学校　　岐阜県立恵那高等学校
担当教科　　社会（地理）

１．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

(1)　タイ国民の日常生活を垣間見る事によって、発展途上国の人々や社会・文化等がかかえる諸問題を認識するよう努める。

(2)　ＪＩＣＡの行なっている事業の具体的な現場に触れ、日本の国際協力の仕組みや役割について理解を深める。

(3)　発展途上国に生きる人々と交流を深める中で、高度経済成長を遂げた日本と日本人について、あらためてそのあり方、生き方を問い直してみる。

２．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

最初の表敬訪問地、ＪＩＣＡタイ事務所で、先ずタイにおける諸事業のあまりにも多岐にわたる状況に驚きを覚えました。所長の表伸一郎さんをはじめ職員からＯＤＡの二国間贈与、技術協力、無償資金協力等の概要を説明していただいた。国際協力の何たるかがずしんと腹に落ち、あらためて日頃の不勉強を反省しました。

またタイにおけるプロジェクト、開発調査等諸事業の現状、実績などを具体的に参考資料に従って解説していただき、協力活動の有様が良く理解できた。

アジア工科大学では日本の頭脳がいかに必要とされているかを身にしみて感じ、資金援助とともに人材派遣の大切さを知りました。うす暗い図書館の一隅でひたすら書に向かう若者の姿を見るにつけ、アジアの多くの青年が母国の発展のために力を尽くしたい夢を持っている様子がひしひしと伝わってきました。

国立家畜衛生生産研究計画プロジェクト（ＮＡＨＰＩ）の訪問では、日本の専門家の多くは農林水産省からの派遣であることを知り、その協力体制が研究所の設立、研究機能の確立と協力など全面的に行なわれていました。

途上国におけるタンパク源の安定供給の一助となるべく畜産の全分野にわたるきめこまかい指導協力の様子が手に取るようにわかりました。特に役牛としての水牛と乳製品を食生活に生かそうとする乳牛の将来についての話は興味を引くものがありました。

チェンマイ大学工学部で電子機器の指導にあたる高橋徹さんとチェンマイ教員養成大学で日本語教師の任につく飯塚道子さんの生き生きした姿を拝見し、深い感動をおぼえました。とやかくいわれる今どきの日本の若者ですが、二人の協力隊員の意欲的な生き様と輝やく瞳に出会い、私自身教師として日頃の教育活動に意を新たに立ち向かう勇気が湧いてきました。

環境研究研修センターは日本の援助で大規模な施設と最新鋭の機器、そして最先端の技術者による協力体制が整っていました。しかしタイ側の受け皿とかなりのギャップがあるように思え、タイ国民の環境に関する意識教育が必要であることを強く感じました。

最後の訪問地ラヨン水産資源研究開発プロジェクトではタイ側研究者の学歴、プライド共に高く、かえって指導が困難であることを知り、あらためて途上国の協力に関する問題点を認識することとなりました。やはり何事も先ず人間関係の重要さを専門家の寺井充さんたちから学びました。

(2) 疑問に思ったこと

タイの協力現場を訪問した限りにおいては、これといって疑問をいだいたことはありません。異なる自然風土、文化を持った人々への協力活動は、日本で考えたものと多少のゆきちがいがあることは、むしろ当然であろうと思われます。援助、協力大国日本として試行錯誤のうちに、より確かな体制が整っていくと思います。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

途上国にもタイをはじめアセアン諸国のようにＮＩＥＳの国々もあれば、ネパール、バングラデシュ等のような極貧国まで様々です。いずれにしても南の国といわれるこれらの国は程度の差こそあれ、飢餓、貧困、自然災害、政情不安等植民地支配から続く構造的な社会問題を抱えこんでいることを知らねばなりません。先進文明国側の開発教育（国際理解）とはこの実情の把握と、北の国々に住む人々の意識やライフスタイルの変革を促す教育ともいえるので

す。私達は今の生活をつづけているだけで南の人々から搾取したり、人権を抑圧してしまう構造になってはいないだろうか。熱帯林の乱伐、森林破壊、漁業資源の乱獲、公害の輸出、危険な農薬を途上国に持ち込むなどする背景には、ややもすると日本人だけ良ければそれで良しとするエゴイズムも感じられます。そんな中での援助の大切さは、あくまでも協力者としての立場に立ち、相手国の自立心、独立心、向上意欲を奪うものであってはなりません。相手国が援助依存病に陥らないよう、また援助する側もやってあげているというような優越感病にならぬようにすべきです。途上国の人々は援助を必要としているのではなく、発展を必要としているのであるからです。

日本のＯＤＡ（政府開発援助）が諸外国からややもすると批判されがちな点をいくつかあげてみると、

① ＯＤＡの額はＤＡＣ（開発援助委員会）諸国中第一位になったが，対ＧＮＰ比でみると10位ほどに低迷している。

② 二国間ＯＤＡでの政府間借款の割合が高く、贈与の割合が低いため、日本企業に有利な国益優先援助ではないかとかげ口をたたかれている。

③ 援助資金で買う物を援助国（日本）の製品に限らない、いわゆるアンタイド化比率が先進国中やはり10位で低く、ビジネスとまがう面もみられる。

このような問題点を今後是正してゆかねばならないが、タイでのひたむきな援助、協力の姿を目の当りにすると、批判は批判としてあるけれど、多くのＯＤＡは確実に地域に根をおろして、人々に貢献していることを認識しました。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

社会科教師として「地理」「現代社会」等の授業において、この研修で得た素材や体験はとてつもなく大きな財産となった。

まずタイの自然、サバナ気候の雨季を実感でき、大河チャオプラヤと沖積平野、そしてその植生、土地利用をつぶさに観察できました。写真や録音の数々が実物教材とあわせて授業で生きてくると思います。またタイの仏教文化と欧米文化との織りなすあやがいかにも途上国らしく目に映りました。トライミット高校の学校案内や生徒の奏した民族音楽を本校生徒にも紹介するつもりです。自由時間でのタイ人とのふれあいも私の研修の主眼でもありました。言葉の不自由さをのりこえ、多くの人々と接することができ、とても満足しています。

彼らの物の考え方、風俗、習慣等同じアジアで暮す人、いや地球人として理解を深め合うことの大切さをタイの人々から学びました。研修旅行中でいただいた多くの参考資料、レジュメ、写真、録音テープ等を駆使して開発教育に役立てたいと思います。特に協力隊員の高橋さん、飯塚さんからいただいた恵那高生への声のメッセージは田舎の高校生には大いに励ましとなりました。

両隊員には深く感謝しています。

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

夏期休暇が8月29日迄であったため、帰国した翌日から教壇に立ち疲れを癒やす間がなく辛かった。8月10日前後の出発日が私にはベストでした。期間としてはネパールが行程から削除されたが、タイの各地を視察できて妥当な日数であったと思います。

(2) 研修日程および訪問先

いわゆる観光が2日間あったわけですが単なる物見遊山ではなく、タイ民衆の心意気や力づよい生活ぶりに多く触れることができて有意義なものでした。訪問先は交通渋滞もあって、ずいぶん時間距離を感じたが、興味のある研究施設や現場を見ることができて良かったと思います。特にチェンマイ教員養成大学とワットトライミット高校は、直接教育現場ということもあって印象深く、とりわけタイの学生諸君の真摯な学問への情熱に心を打たれました。訪問先でもし許されたなら、田畑を耕やす農民と直接話す機会が欲しかったのと、現地の日本企業との接触も何らかのかたちでできると良かったと思います。パタヤは途上国におけるリゾート開発の実態の見聞が主目的であって欲しかった気がします。

(3) その他全般的な所感

訪問先の具体的な内容について事前にもう少し理解しておれば、少しでも予習や訪問先への対応ももっと充実したものになったと思われます。研修中ずっと体調も良く、初の東南アジア訪問ということで何もかも体が吸収したようです。初対面のメンバーを献身的に引率して下さった稲垣さん、鈴木さんにはほんとうにお世話になりました。海外で活躍する協力隊員の姿を彷彿とするものがありました。

この研修旅行で得た体験、知識、感慨を大事にし、ＪＩＣＡの活動を今後可能な限りにおいて広く社会に紹介し、理解を求めて行きたいと思います。そして、わたしたち一人一人が途上国に対してより強い関心をもち、より正しい理解ができるよう努力して行きたいと思います。

ほんとうにありがとうございました。

氏　　名　　小笠原　鋭　雄
所属学校　　愛知県立岡崎工業高等学校
担当教科　　工業（校長）

訪問したワット・トライミット高校は男子校で、6・3・3制の中高一貫教育をしている。歴史が古く、黄金仏のある高校として有名で、観光客が頻繁に出入りしてにぎやかである。生徒は黒ズボンに中学生がピンク、高校生は白色のシャツ姿で、皆そろってスポーツ刈である。珍らしく感じたのは、授業中であり乍ら、中庭で生徒が遊んでいる。その横にスレートぶき屋根のみの食堂があり、生徒と先生が三々五々昼食をとっていた。モンコンスワナコン校長によるモットーは、良くもなく悪くもなく極端をきらう、健康でフレッシュでありたいという。

ＡＩＴ大学院大学は広大な平野の真只中の新開地に、ゆとり一杯の敷地の中にゆったりと建物を配置した落ちつきはらったたたずまいである。25ヶ国から、数年実務経験をして受験する。各大学のトップ５％のハイレベル者が入学するエリート集団である。学問は厳しく３％は退学していくという。卒業生の90％はアジアで活躍中とか。日本政府は図書館と食堂の２施設を供与したが、戦争の後遺症で、大きな顔は出来ないという。今４名が教鞭をとっている。２年間の頑張りだという。

チェンマイ大学では高橋徹さん、チェンマイ教員養成大学では飯塚道子さんの青年海外協力隊員に会い懇談した。２年の期間をフルに活用する熱烈な覇気を感じ、力強く思った。タイ人の中にとび込み、必死に自分の務めに邁進している。若く情熱的で、大きな展望を抱いて生活している事がよく解った。日本にとって重要な役割を果していると感心した。

国立家畜衛生生産研究計画プロジェクト、環境研究研修センター、水産資源研究開発プロジェクトをそれぞれ訪問し、現状を把握し、課題を承知して辞した。ＪＩＣＡのメインプロジェクトと承知した。その道のエキスパートが派遣され、実績をあげているが、タイ人とのギャップがやや大きいとの声が多かった。国情の違いはいかんともしがたく、困難をいかに縮めていくかが大切。時間と費用と人材派遣がついて回るが、日本政府の現状認識が望まれる。最新鋭の施設設備を無駄にしないよう、又、今迄の海外協力の実績をつぶさぬよう、今後の対応を願

うしだいである。

バンコクの庶民生活見たまま

メナム川畔に発達した水路の両側にぎっしり居住する庶民の形態を代表的なものと観察した。川に柱を打ち込み、根太をわたし、板張りの床で居を構えた多くの家々、開放的で戸や障子は見うけない。でも、電気がひかれてテレビも多くの家にある。下水処理施設は殆んど無いという。所謂、たれ流しだ。トイレは自然にしみ込ませるのだという。そのトイレ（学校等）に2種類の水が用意されていた。水槽にひしゃくがあり、これで汲んで、大便の後始末をする。トイレがつまるので紙の使用は厳禁。もう一つが手洗い用である。水路の水はどす黒く見た目は悪いが悪臭は無い。ここで子供が水浴びしていたし、夕方ともなれば大人も同様に入って体を清める。我々には驚きであった。もう一つメナム川は、川上まで総て黄土色である。これは土質が非常に細かい粒子で、水に溶けた状態で流れるので沈澱せず、海に出るという。だから、タイ人に言わしむれば、黄土色の水が一番神聖で、日本の川水は気持ち悪がられようという。

水と言えば、飲み水は買うのである。（水道水が飲めるのは日本だけ）今は雨期、夕方には必ず雷鳴とともにスコールである。日本の集中豪雨そのものである。道路は水びたし、家の中まで水が浸入するが皆なれたもので、大騒ぎしているのは観光客ばかりである。

夜の街路は別の顔を見せる。歩道の両側にぎっしりと並んで日用雑貨の店開きである。主として衣料品だが、みやげもの、食料品も混ってにぎやかである。地元民は勿論のこと、あらゆる人種の観光客も皆出歩くので、なかなかの見ものである。新発見は、ハウマッチで始まる買物が、すぐ電卓が出て値段の押し合いっこ、会話不要で交渉成立となる。この夜店、夕方5時頃、昼店と交替して夜12時過ぎ迄にぎわう。ひとふろ敷の売物とひとかかえのえん台を持っての簡単な店構え、質素な商売だが、物価の廉さと生活水準の低さから成り立つものであろう。

建築中の高層ビルの柱の細さにはびっくりした。百年に一度という地震がきたら、ひとたまりもない。つい先日テレビでホテルがつぶれたと報じていたがさもありなん。でも、自分達が泊まるホテルも同じ造りだろうが、中に入ると全然安心してしまう。恐い話だ。

お米は年3回刈り取るとか。果物は豊富だし、種類も多いが大味だ。空から見

た農地は、よく耕地整理されていたし、水牛を使っての農作業は無く、どこでも手押しの耕運機がエンジンをとどろかしていた。何といっても台風が全く無い別天地である。お二人の付添者のおかげで、大変楽しく充実の旅行、感謝。

氏　　名　　奥　村　　功
所属学校　　京都府立農芸高等学校
担当教科　　英語（校長）

１．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

発展途上国への旅は今回が初めてであったので、主に次の点に関心を持って参加した。

(1)　タイ国の生活・文化・政治・経済・教育さらに歴史などについて見聞を広げたいと望んでいた。

(2)　また、今回の視察の主目的である「タイの発展のために、我が国の果している役割をできるだけ正しく理解する」こと。

(3)　さらに、この視察を通して、今後我が国の学校教育現場における国際理解のための開発教育の在り方を考えたいと思っていた。

２．協力活動現場の視察を通して

日程順に振り返り感想を述べ報告に代えます。

①　ＪＩＣＡタイ事務所において

表所長からのタイにおけるＪＩＣＡの分野別協力実績の説明や、ＯＤＡでは日本は世界一であること。タイ、特にバンコクでの急激な工業発展による「ひずみ」を是正し、正常な発展を促す必要があること。さらに、バンコクの様々な課題 ── 環境問題、地下水等水の問題、交通事情等 ── について懇切な説明を受け、改めてＪＩＣＡのこの国への貢献度を理解することができた。加えて印象的であったのは、日本の若い教員が協力隊に志願し、再び教育現場に戻り、学校での開発教育を推進し、外国を複眼で見ることのできる若者を育成してほしいとの表所長の言葉であった。

②　アジア工科大学において

政治的安定と国土開発のための高級技術者の育成のための大学院大学で、1973年、現在地に移転、日本政府が海外に初めて建てた建物である。アジア各国から実務経験のある優秀な人材を集め、恵まれた環境で先進国レベルの教育（主に工学系）を施し、各国の技術指導者を育成している。ちなみにタ

イ国王女もこの大学院の卒業生である。教授陣はヨーロッパをはじめ各国から集まり、日本人は13名。ＪＩＣＡの専門家の４名の先生方との懇談は興味深い一時であった。

③　国立家畜衛生・生産研究計画プロジェクトについて

24億円の供与額で1986年に完成され、以来７年間、家畜疾病の原因究明と対策の開発等について研究機能の確立と共同研究の推進を図られている。熊谷先生の説明で家畜の口蹄疫が多いこと。受精卵移殖は技術組立ての段階であること。言葉の障害と習慣や考え方の違いで研究のテンポが合わない等、専門家の御苦労の一端がうかがわれた。

④　チェンマイ大学工学部にて

青年海外協力隊員の高橋徹氏の活躍振りを拝見した。タイ全体で約40名のうちの１人で、数多い志願者の中から選ばれて、この大学で電子機器（コンピューター等）の指導をされている真面目で謙虚な青年であった。タイの大学生は日本の学生達より勉強に意欲的であり情熱を傾けるという高橋氏の言葉が印象的であった。

⑤　チェンマイ教員養成大学について

国立の教育大学で、教員だけでなく観光ビジネスマンの養成や社会人向けの講座も開いている大学であり、外国語教育についても活発で、日本語教員として、協力隊員の飯塚道子氏の活躍は好評であった。副校長の説明の中でチェンマイのような北部では、青少年の非行も少く、親は教育に協力的で、学校の先生は大変尊敬されているとのことであった。

⑥　環境研究研修センターについて

田園と沼地の中に、輝くように建っている白亜の立派な建物であった。本年度は９名の専門家が派遣されており、日本が初めて行っている環境に関する総合的なプロジェクト。24億円の無償資金協力で、1991年にタイ側に引き渡された。奥野氏らとの懇談では、タイ国は環境調査が難しい現状であること。現地人の配置が少く、日本人が必要であり、行政と現実とのギャップを感じておられる様子。又、排気ガス規制が完全でなく、下水処理場もなく、環境教育の大切さを強調されていた。しかし現地の人は環境は余り汚いとは思っていないとのことである。

⑦水産資源研究開発計画について

漁場への公害調査と保全システムの研究をされていた。３名のＪＩＣＡの職員との懇談の中で、現地の研究員はエリートの集りで、プライドも高く、引継ぎは容易であること。しかし、現地の研究員との人間関係の難しさ、生活ペースの違い、仕事への姿勢の差など苦労話も出たが、現地人との交流の喜びなど援助効果も高いとの話であった。

３．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

訪問前の学習や準備が十分でなく、さらに、短期間でタイ国の極く一部だけを視察したに過ぎない立場では、実情は判りかねる。だから、若干の感想を述べてみたい。

まず第一に、バンコクの交通事情が悪く、その上、交通規律の甘さに驚いた。次に活力溢れる発展の中で、貧富の差の著しいことにもびっくりした。今後、この国の指導者が調和のある社会の発展をどのように実現されるか興味がある。さらに、仏教と国王の権力がこの国に大きな影響力を持つらしいことを知るにつけ、この国の民主化や開発・発展との関係に深い興味と関心を持ちはじめている昨今である。

次に各種の援助については、まず発展途上国に対してこのような莫大な援助が行われている現状やＪＩＣＡやＯＤＡのこと等々、大多数の日本人には認識不足であり、同じことがタイ国民にもいえると思う。今後一層こうした援助活動が両国民に認識され、真の交流が深められるよう期待している。

４．所　感

10日間の短い視察でしたが、ＪＩＣＡのおかげで、タイ国を直接見聞できたことを大変感謝しています。又、現地で活躍されている関係者の皆様の御苦労に敬意を表したく思います。今後は教育現場において、国際理解のため、特に開発教育の推進のため、今回の視察を可能な限り活用させていただきたく思います。貴重な体験を与えていただいた国際協力事業団に重ねてお礼を申し上げます。

氏　　名　　中　村　和　美
所属学校　　大阪府立久米田高等学校
担当教科　　英　　語

はじめに

1993年度高校教師海外研修に参加する機会を得たことを喜ばしく思い参加致しました。日本のような先進国で何不自由なく生活出来る我々が、拡大する南北間の経済格差の中にある開発途上国に住む人々にどのような形で援助が出来、共に地球人として人間らしく生きていけるかを考え、今後の学校教育に役立てる上で、開発途上国の現状を把握し、現在、我が国が実施している政府開発援助の内容及び現地国に於ける実状を認識することは、今後の政府開発援助のあり方、高校教育の場での国際理解教育のあり方、取り組み方を考える上で、大きな意義を持つプロジェクトだと思いました。今年度は、南米、インドネシア、タイの３班に分かれ、私はタイ班の一員として参加致しました。以下日程に従って報告致します。

８月２１日（土）

予定通り３時30分、スコールに迎えられバンコクに到着。初めて体験する熱帯モンスーンの雨季に於けるスコールに胸をときめかせながらホテルに向った。

８月２２日（日）

日曜日故、視察が出来ず、残念に思いながらバンコク市内視察の一日となる。水上市場、暁の寺院、王宮、エメラルド寺院等市内歴史的遺跡を訪問した。チャオプラヤー川を舟で行くと、舟に乗った物売りがどこからともなく静かにまるでワニが近づいて来るかのように近づいて来て商売を始める。何ともたくましいかぎりである。川の汚染は非常に深刻な状況になっている。下水処理がまったくなされておらず、たれ流しの状態なのである。（後に訪問した環境研究研修センターでの説明でも、この深刻な状況が明らかにされた。）この川の水を生活用水として利用し、子供達はここで泳ぎ、水遊びに興じていた。施設・設備の必要性だけではなく、人々の衛生教育の必要性を強く感じさせられた。バスの窓から外に目をやると驚かされるのは、日本企業の看板と日本車の多さである。開発途上国に

於ける日本企業の進出のあり方を考えさせられる風景であった。

8月23日(月)

〔ＪＩＣＡタイ事務所〕タイ事務所所長　表氏より、タイの現状及び政府開発援助についての説明を受けた。現在、アメリカはアジアより手を引き中南米へ、ヨーロッパはやはりアジアより手を引きアフリカ・東欧へと政府開発援助の方向を変え、日本のアジアへの援助が期待されている。ＪＩＣＡとしては、援助のあり方も、ある中心国を日本が援助し、その国を中心に周辺国にも援助を拡大するという形態をbetterと考えている。そしてタイをその中心国と考え、カンボジア、ビルマなどの周辺国への援助も実施しているということである。それ故、タイへの援助の大切さを強調しておられた。又、地方公務員は現職のまま青年海外協力隊への参加可能な状況になった現在、学校では補充が比較的容易なこと、開発途上国での希望項目が多いこと、帰国後体験者が経験を基礎に実地に開発教育を実践出来るなどの理由により、学校現場からの参加を期待しているとのことであった。今後の日本の役割りの大きさと、開発途上国の日本への大きな期待を感じつつＪＩＣＡ事務所を後にした。

〔アジア工科大学〕アジアの途上国では優秀な人材は、海外で教育を受け、その後帰国せず海外で活躍を続けるという現状打開の為、先進国で行なわれているような教育をアジアの地で行ない、国土開発をになえる優秀な人材、技術知識だけではなく、適正な判断が瞬時に出来る人材の育成を目的に、東南アジア政治機構を核に設立し、その後先進国各国の援助より運営、人材の育成に携っている。ようやく卒業生も各々の国へ帰り活躍するようになっている。今後のアジア工科大学の存在意義の大きさを強く感じられた。

8月24日(火)

〔ワットトライミット高校〕タイの教育制度は、6・3・3制である。ワットトライミット高校は、教育条件は非常に悪く、42クラス1800人なのに教室は30室程しかなく、時間割りの操作で授業をしている。授業中にもかかわらず、休憩中のクラスもあるという状況である。生徒達が休憩時でも廊下のベンチを机にして懸命に勉強している姿には、心打たれるものがあった。

〔国立家畜衛生生産研究計画プロジェクト〕チームリーダーの熊谷氏より説明

を受けた。畜産振興を目的に設立されたこのプロジェクトには、現地の大きな期待が寄せられていた。専門家が派遣され、日夜現地の人々と共に研究に携わり、指導して各々の期間を過ごしている。建物、研究実験機器などのハード面の援助だけではなく、人材派遣というソフト面の援助により、ハード面の援助を最大限に生かせるという意味から専門家派遣の持つ意義の大きさが感じられた。やはり援助のアフターケアが大事である。女性の研究者・職員の多さには驚かされた。日本からの研究員の方々は、言葉・習慣・考え・テンポの違いなど文化的違いに苦労しつつも、今後この施設が現地研究員だけで有効利用出来るように人材育成に日々励まれていた。帰る際、職員の退社時の様子には、生活テンポの違いを目のあたりにした。退社時に出勤簿へのサインの為に長蛇の列を作り、のんびりと話をしながら待っているのである。彼らが日本に於ける退社時の風景を見れば目を回わすに違いないと思った。

8月25日(水)

バンコクより空路チェンマイへ。

チェンマイは、人口600万のバンコクと違い古都の雰囲気に満ちた落ち付いた町である。バンコクでは感じられなかった一面がこの町にはあった。

〔チェンマイ大学〕ゆったりとしたキャンパスでは、多くの北部地域の子弟が学んでいる。将来のタイを背負う人材を育てる場である。日本に対する関心・期待が大きく、日本語学科が設置され、国際交流基金より派遣された方が学生の指導に当っているとの説明があった。東京工大との提携により大型コンピューターを使い協同研究をしている研究室で、教授のアシスタントとして学生の指導に若いエネルギーを燃やしている青年海外協力隊員の高橋氏の姿が印象的であった。今後人的貢献交流が大きく期待されているとのことである。このような協力隊員の姿が、何らかの形で若い高校生に将来の自分達の生きる道を考える上で、良い影響を与えるのではないかと思っている。

〔チェンマイ教員養成大学〕タイの教育をになうべく人材を養成すべく設立されたこの大学でも、やはり日本に対する大きな期待を感じた。チェンマイが観光都市故、併設されている観光ビジネス学科では、外国語教育に力を入れ学生を指導している。ここでも日本語に対する学生の要求が高く、青年海外協力隊員の飯塚さんは、日本語教育の教材作りと学生の指導で多忙な毎日を送っているようで

あった。地域開発の為の学校故、週末にweek-end-studentsを受け入れ、高校卒、短大卒ですでに社会で働く人々が週末に通って来て勉学に励んでいる。観光ガイドとして働く為に必要なＴＡＴ（タイ政府観光局）の証明書取得に必要な単位が卒業により認定されるためである。ここでも日本語の需要が高く、日本語教師が不足し、より多くの日本語教師が望まれている。

８月２６日（木）

ラン園、メーサ渓谷と象の訓練所を訪問。象の訓練所は、山岳少数民族モン族の象を訓練する様子を観光客に見せるべく作られた所である。以前山中でチーク材を切り、運び出す為に象の訓練をし、切り出した材木を象に運搬させていたのであるが、現在では象にかわり、トラックが導入され、トラック輸送へと運搬事情がかわり、訓練所は観光スポットの１つとなっている。モン族の人々の生活が、伐採用機材、トラック等の導入により随分変化したとの説明を耳にすると複雑な気分になり、考えさせられてしまった。彼らの伝統文化を生かしつつ、先進国に住む便利さ優先の我々の考えを押しつけず、公害等様々な社会問題を引き起こした我々の反省を基に、共に暮らして行けるような援助のあり方を探求する必要性を感じた。援助と伝統文化の調和、これが今後の課題の一つだと認識させられた。午後、ドイステープ寺院・プラシン寺院訪問。

８月２７日（金）再度空路バンコクへ

〔環境研究研修センター〕海を埋め立てた所に政府開発援助により設立された施設である。バンコクの環境問題に対処すべく様々な研究研修が行われている。水質汚染、大気汚染、騒音等タイの抱える環境問題に取り組んでいるが、現状把握の為の様々な計測を実施しつつも問題は山積みの状態である。プロジェクト終了の期限が近づいているが、現地研究員だけで研究をやっていけるまで、期限を含めソフト面での援助を考えているとのことである。埋め立て地ゆえ、ポンプで水を外に排出しなければならず、スコールになるとすぐに水びたしになり、非常に問題の多い状況にある。工業化推進の中で、将来予測される環境汚染に対処すべく現状のサンプリングをし、汚染予防を目標にデータを蓄積し、工業化と環境保護を研究の両輪に、日々の研究を押し進めている。物的・人的両面からの援助・貢献が大きく期待されている。

８月２８日（土）

〔ラヨン水産資源研究開発プロジェクト〕当研究所は政府開発援助開始初期の頃、1988年に設立され、現地研究員達と共に派遣専門家達により運営されている。水産資源保護、漁具・漁法の改良、環境保護に関する研究が進められている。当初の期限が終了の後も、「現地研究員だけでやっていけるまで……。」という理由から今なお専門家派遣が続いているのである。ここでも、現地研究員と共同研究をするという点では、文化的違いから生じる様々な問題に悩みながらも一生懸命研究に打ち込んでいる姿には心打たれるものを感じた。

おわりに

今回の研修旅行では政府開発援助による援助の現状の一部を実際に自分の目で見、自分の耳で聞く機会を得ました。政府開発援助に対する批判が、マスコミ等により報じられていますが、今回視察した施設・研究センターでは、援助の目的を十分把握し、それを生かせる点に重点を置き地道な活動を続けて来られた結果でしょう。報じられているような事は認められませんでした。今後機会があればマスコミ等で言われている点についても自分の目で確かめてみたいとも思いました。相手の立場に立ち、共にアジアの一員として歩んで行く方向を探るのが援助の姿、先進国が自らの失敗を援助国で繰り返さず、共に地球人として前進出来るよう助け合う姿、これが援助する際の心すべき点ではないかと考えさせられました。タイの人々のたくましさによって、タイの環境保護、伝統文化保存を考慮に入れながら更なる発展をもたらすことが出来るよう、今後も援助のあり方を考え、共に生きていけるアジアの将来を期待しながら報告を終ります。

最後になりましたが、今回の研修旅行に際し、ＪＩＣＡの皆様をはじめ、専門家、協力隊員ならびに現地でお世話いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

氏　　名　　中　村　博　行
所属学校　　兵庫県立加古川西高等学校
担当教科　　社　　会

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

次の２点であった。

① 日本のＯＤＡの実態を見る。

ＯＤＡについては、かつて数冊の本を読んだことがある。鷲見一夫著『ＯＤＡ援助の現実』（岩波書店）や毎日新聞社『国際援助ビジネス―ＯＤＡはどう使われたか』（亜紀書房）では援助の決定プロセスの不透明さや援助の効果そのものへの疑問などが取り上げられ、日本のＯＤＡ自体がかなり手厳しく批判されていた。また渡辺利夫・草野厚著『日本のＯＤＡをどうするか』（日本放送協会）は特に前記の『ＯＤＡ援助の現実』などのＯＤＡ批判に対して、ある程度日本のＯＤＡの現状を肯定する内容であった。今年初めの県の国際理解教育部会の例会でＪＩＣＡ関西支部長が講演され、ＯＤＡの意義とＪＩＣＡの役割を強調された。そこでこの研修のお話しがあった時、「他人の話を聞くよりも一度自分の目で現場を見てみよう」と考えた。

② アジアの開発途上国タイの現実を見る。

タイについては「ＮＩＥＳにつぐミニ＝ドラゴン」とか「驚異的な経済成長」とか最近ではとかく経済的な方面で注目を集めてきた。もちろん発展途上国タイにどのような形で日本のＯＤＡが行なわれているのかは興味があるが、その点だけでなく最近とみに悪名高い首都バンコクの現状やタイの観光地、そしてタイの人々の素顔などを見たいと考えた。

2．協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

○ＪＩＣＡの無償資金協力とプロジェクト方式、フォロー・アップなどについて、NAHPIや環境研究研修センター、ラヨン水産資源研究所などの視察の中で具体的に理解できたこと。

○青年海外協力隊員２名をチェンマイの現場に訪ねたが、具体的に現場を見

て、話を聞いたことで協力隊員がどのように活躍し、悩み、努力しているのかが分かった。２名の話を聞いて協力隊活動の難しさが少し分かった。そして、その活動に共感をもてた。

○ＪＩＣＡ専門家がそれぞれの現場で本当に努力していることが分かった。さらに日本人とタイ人の国民性の違いなどの具体的な話は大変興味深かった。

○ラヨン水産資源研究所の専門家の一人が「やがてタイ人の環境意識が高まった時に必要となるべき基礎資料をきちんと作っておくことが我々の役割である」というようなことを言っていたが、専門家の心意気をみる思いがして感激した。

３．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

①タイは日本などの援助で確かに数字的には発展途上国を卒業しつつあるが、その富の分配ということに関しては、うまくいっているのかと考えざるを得なかった。バンコクの中の貧富の差はもちろん、バンコクと他の都市との差都市と農村との差など、海外援助がかえってタイの不平等を助長したのではないかとも考えた。

②視察した援助現場の役割が技術的なこと、工学的なことがほとんどだったので、法律の改正とか、警察の改良とかもっと即効的な援助があってもいいのではないかと思った。しかし、それはやはり内政干渉になるのであろう。

③根本的に「日本の援助が本当に有効に使われているのか」という疑問は常にあったが、今回の研修だけではその解答は見出せなかった。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

今回の写真からすでに百枚のスライドを作った。またＯＤＡ問題、ＪＩＣＡの役割、タイの実情、タイへの援助などに分けたレジュメを作成した。これらは職員研修会、県の国際理解教育部会の例会などで教師に報告したい。また、生徒に対しても授業の中での話しや、あるいはスライドや写真を用いて積極的にＯＤＡ問題、ＪＩＣＡの役割、タイの実情、タイへの援助、青年海外協力隊のことなどを話したいと思っている。

５．所感および意見

当初、タイとネパールを訪問するということだったので、海外援助によって経済的に成功した国と成功していない国ということで、両国を比較できることを楽しみにしていた。しかし、折からの政情不安と大洪水でネパールに行けなかった。このことは残念だったが、その分チェンマイにも行けたし、タイを充分見ることができたのでよかったと思う。ただ帰国の時期が８月の最後ですぐ新学期に入るので、我々高校教員にとってはかなり忙しい思いがした。期間は十日間程度で良かったと思う。

最後にこの研修旅行が有意義にできたのも、ＪＩＣＡの関係者の方々のおかげです。どうもありがとうございました。

氏　　名　　松　本　多　恵
所属学校　　鳥取県立米子高等学校
担当教科　　商　　業

1．タイ海外研修に際して

タイというと、最近は、日本で観光地として有名である。私のまわりでも、タイに観光旅行に行ったという人がけっこういる。東南アジアやその他の開発途上国の様子は、テレビや雑誌など通じて様々な情報が提供されており、今や、未知の国々ではなくなってきており、誰でもある程度の知識をもっている。そんな中で、開発途上国の現状や日本の援助の現場を視察するという観点で、果たしてどのようなものが得られるのだろうか、やや焦点を絞りかねた。

とはいえ、「百聞は一見にしかず」タイに約10日間も滞在するということで、日本からや、観光旅行者には見えないタイの側面を少しでも認識して、国際理解に役立てよう、また、直に援助現場で働く在留日本人と接することができる機会なので、彼らの生の声をしっかり聞いておかなければと思っていた。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　アジア工科大学

東南アジア各地から高いレベルの学生が集まり、国土開発の高級技術者を養成する大学院大学で、20数ヵ国政府のＯＤＡ等で設立されたと説明を受けた。まず、驚いたのは、アジアの英知を集めたかのようなアジア工科大学の存在である。タイをはじめとするアジアのエリート達の姿を垣間見た気がする。バンコク市街や川沿いのスラム街の人々との格差がすごく、これがタイの現実なのだと思った。

(2)　国立家畜衛生・生産研究計画プロジェクト

日本の無償資金協力で設立され、家畜の疾病の原因究明と対策の研究開発を行ったり、その関連サービスを実施する研究所であると説明を受けた。日本から派遣された専門家は、農林省家畜衛生試験場のＯＢなど定年になってから、こちらの仕事をなさっておられる方がおられ、年輩の方の貴重な知識技術を生かして援助ができる良い方法であると思った。また、専門家３人に

つき１人派遣される調整員という仕事の存在も知った。その方は世界各地をまわって調整員の仕事をしておられるようで、興味深く見た。

(3) 環境研究研修センター

日本の無償資金協力によって設立された環境にかかわる研究・研修のタイ側の研究者・技術者の養成を目的とするセンターであると説明を受けた。日本では、環境問題が大きな関心を集めており、このセンターにも日本の最高水準の技術・設備を導入して、第一線の人材を派遣されているが、タイでは多少の環境破壊より経済発展優先のようで、思うように成果があがらないようである。また、日本から派遣されたある専門家の話で、「タイの研究者は、研究のやり方を知らないので、研究のやり方の説明に時間をかけているのが現実。また、エリート意識が強く自分達の手で直接実験をするのを拒否する。」という話が印象に残った。

(4) ラヨン水産資源研究開発プロジェクト

フォローアップ段階にあるプロジェクトで、漁獲資源の移行や工業化にともなう公害の漁業への影響を調べて定期的に本として出版する仕事が主な仕事らしい。タイ人にほとんど技術移転がされており、現在は、日本から派遣された専門家は３人である。一番苦労する事は、タイ人との人間関係で、日本人とペースや感覚がちがい、一時が万事、日本のようにはいかず、信頼してもらえるようになるのに１年くらいかかり、やっと２年目から仕事になるといった具合らしい。国際理解も含めた人間関係の構築が、やはり、人類共通の大きなテーマであるのかと思った。

３．教育施設訪問と青年海外協力隊員訪問

(1) ワットトライミット高校

「よくもなくわるくもなく、偉くもなく貧しくもなく」という学校のモットーがとても気に入った。本校の職員の一人も、生徒にプレッシャーをかけなくてとても良いモットーだと評価していた。生徒や教員と直接懇談したわけではないので、授業風景を見て歩いただけの表面的な印象ではあるが、とても陽気であたたかい雰囲気を感じた。

(2) 青年海外協力隊

青年海外協力隊というと、日本でもその存在がかなり知られ、高い精神と

行動力と若さがあれば、誰にでも自分を生かして途上国の人々の役に立てる仕事というイメージがある。特に、多感な高校生にも身近な問題として興味を持つだろうと、私としてはかなり期待をしていた。しかし、経験にもとづくかなりの技術力と語学力、そして、人格がそなわっていないと、任務の遂行すらできない現場であるということを知った。とはいえ、いろいろな苦労や悩みをかかえながらも一生懸命頑張っておられる高橋さんと、飯塚さんはとても輝いて見えたものです。

4．タイの社会状況についての感想

バンコクをはじめとしてタイは大観光地であること。もはや途上国ではなく、先進国と同じような社会問題が存在していること。知的水準の高いエリートとその他の一般の人々との階級の差がはげしいこと。政治、経済、文化とも日本によく似ていること、などの印象をもった。

「人を見たら泥棒と思え」という諺が日本にはあるが、これは、日本で私達が基本的に日常生活で人を信頼して行動し、買い物をする時も店員を信頼して買うという社会風土の上で、そうではないこともあるから注意しろと呼びかけたものであるように思う。

タイでの10日間の滞在の中で、大きな事故や犯罪に巻き込まれることはなかったが、変なものを売りつけられたり、タクシーやバスの運転手に騙されて別の店に連れて行かれたり、果ては、タイの警官に小銭を脅し取られたりと、日本では考えられないことも経験した。また、タイでは定価というものがなく、お店でもタクシーでも交渉で値段が決まる。相手の足元を見て、売る者と客の値切ったり、たくさん支払わせたりと駆け引きがつづくのだが、私達は人がいいのか気が弱いのか、なかなか値切れなかった。

外国旅行をして帰国した日本人がよく、「日本は治安がいいし、やっぱり日本が一番だ」という感想を持つという話を聞く。しかし、どちらかというと日本のほうが特別であって、タイのような社会状況が世界の現実であり、治安のよい日本に浸りきって生活している私達は、さぞかし間の抜けた顔をしていて、カモにされてもしかたないのだなと感じた。

５．タイ海外研修を終えて

タイと日本の歴史を振り返ってみると、アユタヤ王朝時代、最高の官位を授けられた山田長政という存在があり、第二次世界大戦における不幸な東南アジアにおける南進の時期があり、その後の日本の企業進出によって激しい対日批判を浴びた時期があった。そして今、タイは、日本のＯＤＡと企業進出によって、産業構造が近代的に発展し、世界への輸出を増やしつつあり、日本の投資や援助に対する評価が高くなってきている。私達が帰国する日、23時30分東京行きの飛行機を待っていると、22時10分に日本航空と全日空とタイ航空のジャンボジェットが３本、タイから東京に向かって飛んだ。このようにタイと日本は政治的にも経済的にも社会的にも多くの関わりを持っている。そして、訪問したある日本人の専門家が言われたように、忘れてはならないのは、タイ人と日本人の両国の歴史を認識した国際理解と人間関係の構築が何事においても基本であるということだろう。

氏　　名　　岡　野　吉　男
所属学校　　岡山県立高松農業高等学校
担当教科　　英　　語

タイ国視察旅程を終えて

気がつくと帰国の時間になっていた。植物も動物も人々の生活様式も異なっているようではあるが生きようとしてもがき、近づけようとして綱を手繰り寄せる意気込みに巻き込まれて、かつての日本を思いだした。現地を眼と耳だけでなく全身に浴びて心が振動している今、この視察旅行とわが国ＯＤＡの現状について総括しておこうと思う。

バンコクは人口の10分の１以上が集中する中心都市だけあって、道路はバス、オートバイ、自動車、ミゼット、トラックが詰め込まれたように渋滞していて身動きができず、歩道には衣類、土産物、果物、生活用品、食品などを販売している屋台が連なっており、一歩進めば商戦の波に飲込まれてしまう。かくのごとき熱狂的都市でありながら、いかでか金はあまり無いと聞いた。日本、アメリカ等経済強国に富が流出しているのだと言いたかったのだろう。伝統的生活様式が外国資本の企業進出による近代化の波にもまれて、かつて職らしい職に就いていなかった人たちも土産物販売や観光タクシー、土木作業員、観光関連産業従事者として賃金労働者生活をするようになって来た。しかし各種産業が発展するための道路交通法や安全基準法、運輸行政、農業漁業協同組合、労働基準法などや労働者の権利、賃金、健康、生活を維持向上させるための労働組合などの運用が著しく遅れているようだ。こういった面での学校教育が急がれるのであるが、内政干渉になるのだろうか。

家畜衛生および環境管理におけるわが国ＯＤＡの貢献は評価に値するものである。分けても水害防止のために設けられた排水ポンプは水路の各所で作動しており十分な成果をあげている。また、新設された最新設備完備の研究所には先端技術を駆使した精密成分分析装置や大型電子顕微鏡および感染細胞組織切断機など驚くばかりのものであった。とはいえ指導スタッフ確保が困難であることや当国民の理解度が低く、必要最優先の事柄と捉えてくれないところに研究指導員のジレンマが生じているようだ。

学校教育ではやっと中学校が義務教育の範囲に入ってきたところであるが、これも生活水準の低さから達成していない。就学中の生徒達は中学、高校、大学を問わず学業熱心である。わが国派遣の教師諸氏もタイ国経済発展のために日夜尽力しているのであるが、教養文化の向上にではなく実践力の追求に集中してしまうところを残念に思っているようだった。

思い起こせば限りなく、まとまりの無いままの回想になってしまうので次の文を結びとしたい。

資本主義先進国の企業進出が残してきた爪跡を、政府経済援助という名目で尻ぬぐいしているのであるなら、継続してドンドン援助してやらねばならない。しかし、このことで相手国に喜んでもらおうとか感謝されたいなどと露ほどにも思ってはならない。この不測の深みに到達して我が国の繁栄を反省した上で、政府援助が開始されたのだと信じたい。タイ国の伝統的精神文化が資本主義の黄金色に染まらぬように祈りたい。政府が経済援助している発展途上諸国にも同じことを願う。人間の純真さを奪わないで、その国の現状と必要を熟慮したうえで行なえば良い。

我が国が経済発展を遂げ先進国と呼ばれているとしても、ここ僅か数十年のことに過ぎず、何百年も続いているのではない。しかも国民性である勤勉、誠実、努力によって成っただけで、この先どのくらい維持できるのか分からない。また、経済発展に一途だったあまり学校教育もエリート養成に夢中となり、大学進学のための選別教育になってしまった。ここに人間性欠陥症候群が発生し人心殺伐化が進んだ。登校拒否、校内暴力、いじめ、中退が著しく増加し、過労死する労働者も出てきた。人情、思いやり、いたわり、礼節といったわが国古来の美しい人間性が「損得、勝ち負け」に塗り替えられた。わが日本人が対外的に誇れるものが有るとするなら、「おかげさまで」と素直に頭を下げられる内面の美徳以外にあるだろうか。見栄に溺れず繁栄のゆえに高慢にならず、欲しいものがあるなら何でも「どうぞ、どうぞ」と云う大らかさと援助国の将来を心配する思い遣りがあるなら道を踏み外すことはない。21世紀にむけての課題は世界の期待に答えることだけに右往左往するのではなく、しっかりと自国の将来をも見つめて、霊性と呼ぶべき徳性を一人一人が身につけるような国民教育を樹立することが急がれる。

最初に日本の霊性を高めるのに貢献した儒学・朱子学などを基盤にして、算盤による日和見主義を捨て、徳性による自覚を目指す国家が日本にはふさわしい。これさえ心にしっかり定着すれば恐れるものは無い。

氏　　名　　花　房　千鶴子
所属学校　　広島県立安芸府中高等学校
担当教科　　数　　学

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

青年海外協力隊の人々が現地の人達とどの様な仕事をし、実際に役立っているか。また、異なった文化環境の中で苦労しているところや人々との交流をとおしての喜び等をじかに見聞きすること。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

今回、アジア工科大学ほか多くの施設を視察させていただいた。一つ一つの施設やシステムの全てを理解できたわけではないが、その立派さに驚いた。

しかし、一番印象に残ったのは、そこへ日本から派遣され働いている人達の姿である。大きく考えて、教育の場でどうゆう人間を育てていったら良いのか……常に世界に目をむけて良いものは良い、悪いものは悪いと言える人間を育てていくことが大切であるというＪＩＣＡタイ事務所長のお話は特に参考になった。

(2)　疑問に思ったこと

何を援助していくことが一番タイの人達にとって良いことなのかは難しい問題だと思う。今回の旅行では美しい花や海などの自然や豊かな果物や魚などが印象に残ったが、同時にバンコクのすさまじい渋滞、自動車の排気ガス等開発や都市化に伴う問題の解決が急がれている。エイズの問題もある。タイの課題は日本の直面していることでもあり世界の問題でもある。タイの自然を破壊せずに開発や工業化を進め、経済的に発展していけるように、援助の内容や形は今のままで良いのか疑問に思った。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

アジアへの旅行は初めてでした。途上国と呼ばれる国も今回が最初です。まずバンコクの人々の活気に圧倒された。貧しいといえば貧しいし、人々の教育

水準が低いというのも確かである。でもこれから伸びていこうとするたくましさ、したたかさを感じ、南国の楽天的な気質とアジア人に共通する真面目さがうまくミックスしていてこれからが期待できる。

ＪＩＣＡタイ事務所長のタイへの海外援助に対する総括的な考え方や分析は、納得のいくものが多くあった。その一つは、とにかく多額の援助をというものではなく、タイがこの東南アジア地区で何らかのセンター的役割を果し、自国の開発を進めていくだけでなく近隣の国々の相談に乗ったり、技術を伝えたり出来る形が良いのではないか。そのための日本からの援助というのなら、ただ立派な施設や高価な機器というだけにとどまらず、大きくアジアの将来にむけて広がりを持つ、展望のある援助だと思える。また、もう一つ心に残ったお話は、援助の中心はお金ではあるが本当に大切なのは人であるということである。日本からの人材派遣の具体的な方法として、地方公務員（学校の教員を含む）が現職のまま２年くらい行って技術を伝え、またもとの職場へ復帰できるようなシステムが必要である。これは県によっては可能であるが、他県や様々の民間会社にも広がってほしい。また、シルバーボランティアの内容もこの時はじめて知ることが出来た。

マスコミでは、途上国援助についてきびしい批判を行っている。そういう本も読んでみた。一つ一つの問題点については、確かに指摘された通りかも知れない。でも今回の視察を終えて感じたことは、まず行動が大切であると思う。援助をいろいろな形でやってみて、改善すべき所や文化や習慣のちがいからくる困難さもわかってくるのではないだろうか。今はもう日本だけ豊かであろうとしても無意味である。広くアジアや世界へ目を向けて共に問題の解決をしていかなければならない。

４．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

本校には国際科を中心に将来は海外に出て活躍したいと考えている生徒が多い。ＪＩＣＡの活動は日頃から興味を持ち、関心をよせている。映画や講演などでその内容については少し知っているが、今回の経験を生徒達に話してやり具体的なことの理解を進めたい。また、今後もＪＩＣＡ中国支部とも連携を取り新しい情報や知識を得たいと思っている。

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

今回の様に夏休み中に10日間程度が良い。

(2) 研修日程および訪問先

研究所よりは青年海外協力隊の活躍している現場を数多く見たいと思った。自由に行動できる日がほしい。あとは満足です。

(3) その他全般的な所感

ネパール旅行が中止になったことが残念でしたが、タイの人々の生活や文化にふれることができ、期待どおりの楽しい視察となりました。ＪＩＣＡの皆様に感謝しております。

氏　　名　安永　　潔
所属学校　徳島県立勝浦園芸高等学校
担当教科　農　　業

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

日本の援助活動の現状と、その活動がタイ国やタイの人々にとって、どういかされているか。

2．協力活動現場の視察を通して

開発途上国への援助は、生活水準の向上と経済開発であり、その基盤となるのが教育であると、自分なりの考えを持って参加した研修であった。その視点からアジア工科大学の存在意義は大きいと思われる。将来においてアジアの国々の技術力の向上に大いに貢献するだろう。後日見学した環境研究研修センターでも素晴らしい設備を見学し、話も聞いたが、分析機器やデータ処理を行える現地の人材がいないらしい。アジア工科大学はこうした人材養成の担い手である。

青年海外協力隊員の現地視察（チェンマイ）も、教員養成大学とチェンマイ大学工学部で日本語や情報処理を現地の学生に教える若者達であった。二人とも学校という組織の一員として勤務していたため、上司や周囲の先生方に気づかいする面もあるようだが、協力隊員としての任務を自覚し、強い意志をもって任務に励み、現地の学生に溶け込んでいた。協力隊員の地道な活動と情熱に改めて頭の下がる思いがした。

環境研究研修センターでの日本人スタッフとの話の中で、タイの環境問題が目で見る以上に深刻かつ複雑なことを改めて理解した。生活が環境と直接結び付いているのは当たり前だが、マクロ的視野に立った政策がまったくなされていない。これは交通問題・公衆衛生・公害問題どれをとっても同じである。森林再生プロジェクトでは気候が幸いして10年で再生されたというが、それ以上に急務だと思った。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

水上市場へ向かう観光船の私たちに、水上生活をする子供達が笑顔で手を振

り、さも「おじちゃん見て」と言わんばかりに濁流のチャオプラヤに飛び込む。日本の子供達と同じに無邪気で天心爛漫である。その風情はとても心地よい。次の瞬間物売りが、船で声をかけ船で囲む。人々の生活がそこにある。

商店街の路上や歩道橋の隅に乞食を見る。1歳になったばかりくらいの子供を抱く母親。昼間裸だった子供が夕方下着を着ける。夜も暗くなると母親はタオルを巻き、抱き寄せる。その頃赤ん坊はもう眠っている。

ワットトライミット高校で、廊下を歩き教室の授業風景を見る私たちに少し照れながら、愛嬌をふりまく子供達。自分の教室をのぞいているようだ。

この子供たちは何を考え、何を夢見ているのだろう。大きくなったらどう生活するのだろうか、と考えさせられる光景を目にすることが多かった。これらの子供達に同じような夢を与え、同じ服を着せてやりたい。そして同じように教育を受けさせてやりたい。素朴な感想である。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

・職員研修においての報告

・園芸（文化）祭での資料展示

・教科指導

栽培環境……タイの気候と栽培方法

畜産……農水産関係プロジェクトの協力現状

農業基礎……青年海外協力隊員の必要性と現状

ＨＲ活動……日本の文化と生活様式

生徒会活動……募金活動の意義

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

夏休み中でよいが、前半が好ましい。（事後処理があるので）

期間は1週間程度でよいのではないか。（校務のため）

(2) 研修日程および訪問先

今回の変更前の計画でよいと思う。子供たちと触れ合う時間が少しほしかった。（高校見学で）

(3) その他全般的な所感

・同行していただいた方々、また現地での添乗員の方のご配慮に感謝したい。

・事前資料にあったA型肝炎の予防接種は、最近接種できる病院が少ないのではないか。徳島県にはほとんどないと思う。

氏　　名　　宮　武　裕　樹
所属学校　　香川県立琴平高等学校
担当教科　　英　　語

タイ研修旅行印象記

今回の視察旅行に参加するにあたって、やはり最も興味をひかれたのは教育機関の訪問であろう。“日本の教育”にどっぷり浸っている我々にとって異国の教育現場を拝見できるということは願ってもない機会であった。最初の訪れたワット・トライミット高校では、まずその場所に驚いてしまった。私がその時「まるでこれは浅草の境内の中ではないか！」と、おもわず独り言を漏らしてしまったほどである。そこは観光地であった。とにかく観光客も含めて人が異常に多い。猫の額ほどの（土のない）運動場では大勢の生徒達がバスケットボール等の球技に興じている。静かであるはずがない。環境的には最悪である、と率直にその時は感じた。しかし、その後の先生方及び生徒達との交流会、授業見学と続くなかでその印象は徐々に薄れていった。

いわゆる“つっぱり生徒”はいない。制服に身を包んだ彼らは皆、明るくさわやかな印象を与えた。交流会での見事な剣舞、まさに火花散る迫真の熱演であった。また演技に合わせて民族楽器を巧みに操り、その演奏レヴェルも高いと思った。ここでは日本のクラブ活動に当たる“アクティヴィティ”と称するものがあり、これもその一環とのことである。もし我々が人をもてなす場合にはどうするであろうか。うらやましく思ったのはタイ古来から伝わる伝統的な芸能を若い生徒達が完ぺきなまでに習得していることである。文化の継承という点において、我々は、はるかに遅れている。西洋に眼をむけた“文化の模倣”はさかんであるが、どれだけの者が自然な日常の生活の中で、日本の伝統文化を実体験し、理解し、再現できるであろうか。私自身、何かやれと言われても何もできない。まさに“日本人失格”を痛切に感じた。

授業も見学させてもらった。英語教師であるから必然的に英語の授業に関心が集中した。教科書はほとんど会話中心のやさしくかつ、実践的なものであった。クラスの人数もざっと数えて20数名。日本の約半分である。またユニークだと思ったのはＡＶ教室らしきものがあり、なにやら授業をおこなっていた。英語文化

に親しむ時間だそうで、なんと、彼らはマイケル・ジャクソン(その時タイで彼のコンサートが本当に行われていた)のライブビデオに見入っていた。ちらりとその他のビデオに目をやると子供向けのディズニーの作品もあり、これは全員が英語好きになるぞと思わざるをえなかった。日本の現場ではそうはいかない。見えざる制約、周囲の圧力……楽しくやれるはずがない。英語を学ぶ目的が異なると言ってしまえばそれまでだが、本来の教育の原点を垣間見たような気がした。

またその他に独特であると思ったのは、寺院での正しい参拝の方法を教える授業があることだ。こと礼儀作法を重んじる教育を日本で実践しようとすれば所詮ジョーク程度の認識でしか受け止められないだろう。まだまだ仏教文化が広く一般社会に浸透しているからであろうか。タイでは、教師は羨ましいほど慕われ、尊敬されまた社会的地位も高い。しかし日本ではどうであろうか。その念が年を追う毎に薄らぎ、教育に関わる諸問題が山積してきた。知識の面でははるかに日本が凌駕している反面、道徳的な側面はなおざりにされてきた。その歪みが今の教育に如実に現れてきたともいえるだろう。それ以外にも複雑な要因があると思うが、とにかく日本では失われつつある教師と生徒の信頼関係がそこには確実にあった。

この高校訪問だけをあげても、まだまだ書き足りないことがあるが、最後に全体的な感想を述べてみたいと思う。昨今"人的貢献"という言葉をよく耳にする。日本は金は出すが人は出さない、といった非難を世界中からされてきたと理解しているが、今回の視察でその非難はあまり正確なものではないということがわかった。現場に出ることは勇気がいることである。ましてや命の保証も危うい場合がありうる。きびしい状況で優秀な日本人技術者達が必死になって働く様を目のあたりにして自分自身が小さく思えたのが、この視察を終えての大きな収穫である。一体、自分はなにができるというのか。ぬるま湯的な生活を続けてきて、あれやこれやと非難する資格があるのか。教育現場で教室という狭い安全な所で好きかってなことを論じて、一体どれだけのことを過去に実践してきたというのか。汗の一滴も流すことなどないじゃないか。言うだけなら誰にでもできる。知識だけで物事が解決できるのか。我々に不足しているのは行動力であるということ、しかも何か思い切ったことをしようとすれば、つまらない多くの制約が待ちかまえており、現在の生活パターンからの脱皮は容易でない立場に我々教師は置かれていることを思い知らされた意義ある旅行だったといえよう。

氏　　名　　松　尾　義　嗣
所属学校　　長崎県立佐世保南高等学校
担当教科　　社会（地理）

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

私の「地理」授業は、書物や参考書、映像に頼っている。今回の研修は、現地に出掛けてそれらの知識の一部（特に熱帯の自然とそこに住む人々の生活）を自分の目で観察出来るいい機会として捉え、日本と異なった環境の特性と、そこに住む人々との共通性の何かを感じとりたい。

平成６年度から始まる高等学校新教育課程の改訂の中心のひとつに国際理解教育があげられている。ところが普通科課程の高校では特別にそのための時間がカリキュラムのなかに設定されたわけではないので、それぞれの教師によほど国際教育に関心がないかぎり、普段の教育活動のなかにとりあげられることはないだろう。

１人でも多くの生徒や教師に国際理解・交流・協力に関心を抱かせ、次の行動への動機づけさせる手がかりを摑む。

10年前に観光でバンコクを訪問したが、その後の経済発展で変貌した様子を確認したい。

わが国の開発途上国への援助の具体的な例や協力隊員の活動を視察し、途上国への協力援助について考えるとともに、多くの人に伝えたい。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

これまで日本の援助の実態について殆んど知らなかった。今回、援助の一部を実際に視察、その意義について考えることが出来た。

アジア工科大学そのものが驚きであった。このような大学院大学であれば、日本からもっと多くの研究者や指導者を派遣し、資材を援助すると途上国の発展により貢献度が大きくなるのではないかとも思った。

チェンマイ大学・チェンマイ教員養成大学では、若い協力隊員が自分の持味を生かして活動している様子は頼もしいばかりであった。日本にはもっと

もっと多くの隠れた人材が居ると思われる。これからの若い人材を直接・間接に国際社会に自然に目を向けるようにしていくのが重要であり、教師の果たす役割を痛感させられた。

環境研究研修プロジェクトは途上国の設備としては立派なものであった。経済発展の著しいタイならばこそ将来に向けて必要な機関であろうと思えた。

ラヨン水産資源研究開発プロジェクトについての援助は延長期間だということであったが立派な設備であった。ここでの成果も将来に期待するような感じであった。

それぞれの視察先に派遣されて来ている人々が明るく活躍されている様子と、現地の研修員や学生の素直そうな「自然の心」に接した時、日本の援助の成果はタイの発展に貢献出来るものだという感想をもった。

(2) 疑問に思ったこと

時間を無限にして援助を続けても無駄が多いと思うが、協力隊の２年間やプロジェクトの５年間という期間が援助の成果を効果的にあげ得る期間として充分なのだろうかと疑問を抱いた。当然これまでの実績から妥当な期間としてだされたのであろうと思うのだが。

また、援助の成果が目に見える建築物などは別として、研究・研修の成果などはどのように判定するのであろうか。

相手国の要望に応じた援助だと思うのだが相手国に背伸びした要望があるのではないか。

環境プロジェクトで研修を受けても現実にはその能力を発揮できる職場がないと聞いた。

３．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

タイは途上国の一員とは言ってもＮＩＥＳの段階に近い経済発展を成し遂げている。

しかし、国内の所得格差は大きく、まだまだこれから解決しなければならない問題は多い。さらなる経済発展のための援助も必要であろうが、途上国が経済的に自立することが大切である。

立派なビルの横にスラムがあってと批判的に観る人が多いようであるが、もともと水辺に自然とともに生きてきた人々である。確かに地方から流入した人

口が多いからスラムに見えるかも知れないが、あれはバンコクの一般住宅であろう。日本の下町と同じと思う。

10年前と比較してみると、経済発展の目覚ましさは素晴らしいものであった。しかし、変わらないのは「水」事情であった。

地元の人でも水で飲めない水道、浄水場は立派なものがあるが蛇口までのパイプが悪いからそのままでは飲むことが出来ないのだと誰かが話していた。原因がはっきりしているのなら、今までの水道管を捨てて、全く新しい水道管を敷設すると「水事情」は解決できるのではないか。

バンコクは過密都市で都市機能がマヒしている。もう、どうにもならない状態にあるという。タイであれば解決は簡単だろうに、王様に遷都をしてもらって、新しい王宮殿と政府機関をそこに移して新都市を建設するとよい等々、勝手に想い巡らせて楽しんだりしていた。

タイのような経済力をもつ国へは、自然と援助額や事業規模も大きくなり、もはや、それは「投資」の分野に入ってしまうのではないだろうかとも考える。

途上国が自立していくのには「教育」の果たす役割が最も重要だと、この研修を通じて痛感し、今後、途上国の開発・援助は当然のことながら最貧国や地域の経済基盤と医療関係の整備を中心にしながら、学校建設と教員養成に重点をおくべきだと思うようになった。

内政干渉にならないように、識字率を高め、計算が出来、民主主義の基本が理解できる途上国の教員養成の学校を日本の地方都市に建設したらよいと思う。いろんな途上国の学生が集まり国際社会を理解した教員が育成出来るであろう。

ベトナム、カンボジアに平和の兆しが見えてきた。タイを通してみたインドシナ諸国は、今後、大きな経済圏となる可能性を秘めているように思える。平和な社会の建設に日本も貢献しなければならない。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

新教育課程で国際教育が取り上げられたとしても、そのための教科が誕生したのではない。世界史学習が必修になる。もちろん大切な科目であるが開発問題・環境問題等、深く学習出来るものでない。公民科の現代社会や地理歴史科の地理ではこれらの分野についてふんだんに取り扱いが可能である。

ＪＩＣＡは世界各地に張り巡らした情報網をもっている。「国際協力」とい

う雑誌は写真もいいし、読みやすい。ＪＩＣＡのプロジェクトや事業の解説・紹介と援助の実態・国民生活の紹介などを充実させて学校や特に地理の教師に配布すると活用度は高まると思う。

５．所感および意見

(1) 研修時期および期間

夏休み期間が適当である。今回のタイ班のように帰国した翌日から出勤というのでは疲れが長引く。殆どの学校は31日は職員会議または二学期の準備で出勤となっている。

10日間の日程は視察先もゆっくり余裕が以て組めるが、１ヵ国の場合には長すぎる。

１ヵ国視察の場合だと一週間程度が妥当であろうと思う。

(2) 研修日程および訪問先

視察先はバラエティーに富み楽しいものでした。高校生に紹介するのに協力隊員の生活をもう少し詳しくみたかった。職場だけでなく、プライバシーを大きく侵さない程度に宿舎なども見れると安心出来たと思う。

朝の出発時間がゆっくりだったのは健康管理からも大変良かった。

水産プロジェクトを休日に訪問したが、今後は平日がよいと思う。折角の休日を無駄にさせないことと、現地の人の表情が見れない淋しさがある。

研修目的である視察先の事前研修及び資料が全くなく、日程表で見る名称から何となく視察先を察する程度であり、予備知識もなく現地に着いて初めて視察先の内容が摑める状態であった。これでは視察の効果も充分でなく、その場しのぎとなっても仕方がない。どのような立場の人に会えるかもわからず、思い付きの質問しか出来なかった。

(3) その他全般的な所感

最初の予定でネパール国が訪問できるとあって、その期待は大きかった。ネパール国に行けなかったのが本当に残念であった。しかし、そのためにチェンマイを訪問できて本当に良かった。

いろんなところを一通り観光も出来たし、ホテルも素晴らしく、一人部屋が確保されたのが最大に良かった。24時間も他人と一緒が10日も続いたら、必ずトラブルが発生する。自由にゆっくり眠れて良かった。

(4) 今後に期待したいこと

① 必要経費（明細をふくめて）出発前に、きちんと計算して徴収するか、示すべきである。現地での徴収では内容がはっきりせず、領収書ももらえない。（本人負担はパスポート作成と宿泊・食費等となっていた）空港使用料・観光費を含む交通費等々どこまで個人負担であったのか不明である。

② 観光については精選して、現地人の研修生・研究員との懇談会の時間を設定したらよいと思う。日本の援助等について援助される側の意見や希望が聞けると思う。

また、中間日か最終日に参加者の意見交換会があってもよい。ＪＩＣＡ事務所主催のパーティーの時は料理があんなに残ってしまい、初対面で中身の濃い話は出来ない。あの時間帯で全員に一言ずつ話をさせると、皆の気持ちや考えの一端が掴めたと思う。

③ 解団式は最終日の搭乗前に済ませ、成田では乗り継ぎもあるから流れ解散とする。

最後に

本当に有意義な研修であったと思う。

企画した人、引率した人、お世話した人、現地で会った人々皆さんに本当にありがとうございましたと感謝したい。

これからも国際教育関係に積極的に貢献できるよう努力していきたい。

氏　　名　榊　　定信
所属学校　熊本県立蘇陽高等学校
担当教科　国　　語

タイ・ＯＤＡの旅

８月２１日（土）

私たち一行のバンコクの空港到着は、烈しいスコールの歓迎で始まった。

空港から、アンバサダホテルまで、相変らずの車の洪水と渋滞が続いていた。道路の両側には、工事中のビルが目立った。騒音、混雑、排気ガスの匂いと煙、タイという国のエネルギッシュな発展ぶりの姿でもある。

そして、数年前に比べて、走り回っている日本車のトヨタ・日産車がずいぶんこざっぱりとしてきた。タクシーの屋根にも、大きな表示がつき、メーターもついて安心して乗れるようになったとのことだ。

訪れるたびに、ひと皮むけるように美しくなっていく町並、庶民の生活も、快適さを追求し、豊かになってきているのが実感できる。東南アジアの中でも、その経済成長率では、数少ない優等生である。

車窓を通り過ぎる風景をぼんやりと見やりながら、カンボジア難民が、タイの国境線上に押し寄せてきた時、高校生たちとユネスコ活動の一環で、難民キャンプ（カオイダン、タケオ、アランヤプラティト）などを訪れた時を思い返していた。いつの間にか日が暮れ、やっとホテルに到着した。

ホテル周辺には、露店商が店を並べ、裸電球が、店頭の商品をあざやかに照らし出している。肉を揚げる油の独特の匂いと共に、バザールの夜は健在であった。

８月２２日（日）

この日は、１日中、バンコクの市内観光であった。水上マーケットで、押しの強いおばさんに買わされたドリアンは、くだものの女王の名にふさわしく、そのうまさは格別であった。水上マーケットの水路の両岸には、今にも沈没しそうな船が止まっている。

両岸には、塩の倉庫が多く、塩を運ぶ船が多いとのこと。又その船をすみかとする水上生活者がいる。母なるメナムも、バンコクは工業化と生活排水のため、

ずいぶんと濁っている。しかし、水上生活者たちは、メナムの悠久の流れの恩恵に感謝しているかのように、淡々と日々の暮らしを続けている。

衛生面を気づかう私たちを尻目に、子供たちは、無邪気に泳ぎ回っている。水上マーケットの狭い水路は観光船のラッシュである。

沼に物音がすると、浜辺に眠っているようだったワニが、「すうー」と泳ぎ出すように観光船のエンジンの音が近づくとどこからともなく、果物や、日用雑貨土産品を満載した小船が集まってくる。「社長、千円、みんなで千円。」小船を巧みにあやつりながら、声をかけてくる。熟練した観光船の船頭は、船と船の間を縫うように進み、我々が一番良い場所にチャント船をつけてくれる。上ってみると、土産店には、売り子として山岳民族の幼い子どもたちが目立ったのは、気になった。

暁の寺院、エメラルド寺院と多くの寺院を回った。仏教が庶民の中に深く根ざしていることを感じた。王宮では、タイの民衆から、絶対的な尊敬を受けておられるのを感じたし、日本の皇室と違って、政治的ジャッジ権さえ握っておられる。王宮だけでなく、町中に、王妃の肖像画がイルミネーション付きで飾ってあり、王妃の誕生日が近いとのこと。

又、観光地で様々な国の観光団に出合ったが、以前より米国、ヨーロッパの観光団が姿を消し、アジア系の台湾・韓国の観光団がいやに目立ち、その動きもエネルギッシュであった。今日の国々の経済状況をそのまま反映しているものと、大へん興味深かった。

８月２３日（月）

いよいよ、今日からＯＤＡ視察。

まず、タイＪＩＣＡの事務所の所長より、タイにおけるＯＤＡのレクチャーがあった。

タイにおけるＯＤＡの総論と課題をまとめていただいた。特に感心したのは、所長が、これまでの日本教育における国際教育の流れを熟知されていたことだ。

戦後、文部省はユネスコ協同学校を設置し、国際理解教育を広げる拠点とした。異文化理解、相互理解を基礎に。一方、外務省は、南米移住の宣伝広報のひとつとして、農業高校の中に、海外事情研究部を作らせ、その成果を上げようとした。この二つの流れは、国際化が叫ばれるようになった今日も存在している。全国高

等学校国際教育研究協議会と、全国高等学校ユネスコ指導者協議会は、最近、開発教育の登場で互いの乗り入れ研究の場も出来つつあることは喜ばしい。

ＯＤＡの中枢におられる所長が、国際教育の流れを熟知されていることは、国際教育に携わるものとして意を強くするものである。

タイにおけるＯＤＡも、質的変化を時の流れと共に、とげつつあるようだ。はじめ、最低の衣食住の生活保障をすることから、食糧増産・環境整備・情報社会への移行、メディアプログラム・農村開発、それぞれの分野での人材育成と日本のＯＤＡが確実にタイの社会で、花を咲かせ、実をならしている状況が報告された。この状況を高校生たちに伝えるのが、私たちの任務であろう。そして、その高校生たちが、アジアに対して深い理解を示し、次の時代を担っていってほしいものである。短かい所長のレクチャーであったが、タイにおけるＯＤＡの状況がよく理解できた。

それを支えているのが、単なる「金」ではなく「人」であるということも。多くの日本人が短かくて３ヶ月、長くて４年をタイに滞在し、タイの人々と共に暮らし、喜びも苦しみも共有しながら歩み続けておられる方々に多数出合せてもらった。

日ごろは、タイ人に対する、いくつかの不満もあって、過されているのでしょうが、私たちのような、一過性の旅行者が、したり顔で「タイ人は、あまり働かないのではないか」「メナム川で、水浴したり、一方では、生活水として使用しているが、衛生観念はどうなっているか」とぶつけると、予想に反して「いや、そうではない、むしろ日本人のほうが不潔とタイの中では見られていますョ」、

「日本人は、汗をかいても、２、３日過ごす人がありますが、その点タイ人は、１日何回もシャワーを浴び、そのつど下着まで着がえをする。日本人よりずっと清潔好きですよ。」

そこに住んでみないとわからない情報があることを知らされた。

昼から、アジア工科大学の視察となる。

日本人教官と歓談に続いて、キャンパスツアー。アジアからの留学生たちが、自国の発展に寄与するために熱心に勉学に勤しむ姿がみられた。アジアの留学生たちが、自国の国造りに夢を抱いて、学んでいる姿を、偏差値で輪切りにされ、合格すれば、無目的に若い大切な時期を漫然と過ごしている日本の大学生たちに、立ち合せたい光景である。

アジア工科大学が、日本への留学の足掛りとなっているようだが、今後、アジア工科大学にも、文化系の大学院大学が必要となるのではないかと考えた。アジア人のアイデンティティーの確立のための基層文化の研究——たとえば、言語学、民族学、民俗学、文化人類学などの共同研究の場として、必要性が高まってくるのではないかと夢想してみた。

８月２４日(火)

有名な黄金仏のある寺院、その中にあるワットトライミット高校との交流、交歓会があった。寺院の中庭と校庭が共有されていた。

そこで、生徒たちがバスケットに興じていた。最初ホールに通され、お茶のかわりに、冷たいやしの実の接待をうけた。

全員が男子生徒なので、サービスも男子生徒がひとり、ひとり手を合わせ、タイ式礼で、応対してくれた。

校舎内を巡回して、気づいたことがいくつかあった。ひとつは、廊下に張ってある手づくりの工夫を凝らした張り紙である。

先生たちの生徒へのメッセージが、きちんと伝わってくる。時事問題、難民、台風の被害、ホテル崩壊のニュース、環境問題、今日的地球益、人類益に関心を持つべきだという主張が伝わってくる。ヨーロッパ・アメリカ・カナダの学校も回って感じたことだ。

日本の学校内には、どこかで送って来たポスターを張ることでお茶をにごしているのが現状ではないか。今、日本の教育の中で求められているのが、カリキュラムに表われていない部分の教育化であろう。特に、国際教育などは、この視点が研究される必要がある。

今ひとつ、感心したのはビデオによる道徳の授業。テレビには、坊主さんがくりくり頭の子坊主に礼拝の作法を教えている。それをみながら、机の上に生徒が座り、寺院での作法を学んでいた。仏教とタイの結びつきはさることながら、学校内で敬虔な仏教徒をつくるという意気ごみがある。

日本の中では、信教の自由ということで問題となるところだろうが、韓国の高校でも伝統作法を学ぶためのセミナーハウスがあって、２年生の２学期の２週間から３週間ほどセミナーハウスに寝泊りをしながら、韓国の伝統的作法について学ぶ場があった。

日本の教育現場から、伝統文化・作法を学ぶ場が皆無である。戦前の国粋主義への反発イデオロギーの間で、不幸な扱いをうけてきた。それは、家庭教育の範ちゅうだと言えるかもしれないが、その家庭が核家族化し家庭の教育力が疲弊している中で、日本の共同体が受け継いできたもので、後世の子どもたちに、伝えていきたいものを、今一度考える時ではないか。地球市民をめざす国際教育の中でも「顔のない日本人」といわれる。

日本の若者の国際交流などの場における自信のなさは、こういう所から生まれて来ているのかもしれない。

タイの生徒たちが、民族楽器を楽しそうに演奏し、誇らしげにタイの武闘を演じてくれた。そのあと先生のタイダンスも堪能させてもらった。

８月２５日（水）

バンコクの喧噪を離れて、高原の古都チェンマイに着いた。チェンマイは期待どおり、古(いにしえ)の高貴な香りを漂わせていた。いきかう人にもどこか気品を感じさせた。

チェンマイ大学とチェンマイ教員養成大学を訪れた。青年海外協力隊員の高橋君と飯塚君に会うためだ。高橋君は、教授と若い生徒の間にあって、何かと気苦労も多いとか。飯塚さんは、学生たちから「道子、道子」と親しまれ、他の先生方からも期待されているようだった。しかし、二人は、まだまだ自分達はめぐまれていて、奥地で活動している他の隊員の方々のことを心配していた。

２人の健康と健闘を祈って、その夜は、パーティーが開かれた。

その夜、かねてから入院していた父の容体が急変したらしく、妻からの国際電話が入った。チェンマイではどうしようもなく、旅行社に帰りの航空券を依頼する。

８月２７日（金）

チェンマイからバンコクへ帰り、その足で環境研修センターへ行った。

これから、タイの工業化が進めば、必ずや大気汚染・金属汚染、それによる環境破壊という公害が起ってこよう。センターには、最新鋭の設備がそろい、基礎データが集められている。アジアの工業化にとって、貴重な基礎データになることだろう。

父の容体が気になり、ホテルに着くとすぐ空港に向った。この旅行中、素晴らしいコーディネータの武田氏と再会を期して固い握手をし、機内人となった。

ソウル経由で熊本に帰国した。

父は私が帰国した次の日に他界した。この雑文を亡父にささげます。

最後に

このような機会を与えていただいた国際協力事業団及び国際教育研究協議会の皆様に感謝致します。

氏　　名　小　野　伸　通
所属学校　大分県立別府鶴見丘高等学校
担当教科　社　　会

1．タイの印象

到着早々のスコールは、地理の教師の端くれである私には、雨季でもあり午後4時ともなれば当然のことではあるのだが、やはりセンセーショナルな旅の幕開けであった。早速驚かされたのは、文献資料やビデオなどで知ってはいたものの、自動車の多さによる交通渋滞のひどさである。これは、平均的な国民所得から考えると、帳尻の合わない風景であり、急激な変化、高度経済成長のもたらした歪みの産物であろうか。車種もトクトクと呼ばれる三輪車のタクシー・普通車トラックからドイツの高級車まで、20年前のものから最新式のものまで種々雑多である。バンコクの町並みは、高速道路や高層ビルの建築ラッシュで、視界の中に工事現場の消えるときがない。しかし、日本のそれと明らかに違うのは鉄筋の量と床のコンクリートの薄さである。また、バンコクは海抜高度が低く、数年前までこのシーズンはすぐに町が水浸しになっていたとのことであるが、援助による排水設備の拡充によって改善されてきているそうである。高速道路の脇には、それと思われる大きな鉄管がところどころにはしっているのが見られた。近年格段にきれいになったと言われるバンコクではあるが、外見的な近代都市ぶりには、本当に驚くばかりであった。有名な寺院などは、世界の人々であふれ観光地化の状況は劇的なものがあった。観光バスや高級リゾート、売店内の文字などに中国系の華僑と呼ばれる人々の影響力の強さを実感した。

2．日本の援助（ＯＤＡ）のあり方について

ＪＩＣＡ本部や研修機関での話や今回の研修旅行前から思っていたことではあるが、ＮＧＯなどとの性格的な違いをはっきりし、協力できることと、できないことをはっきりさせ、それをもっと伝えていくべきであると思った。要請を基本原則として、行っていること。自助努力に期待し、近代化の芽を育てるため現地国の中枢をなすべき人々にアクセスし、その裾野を彼らの手によって広

げていくことを期待し、先行した設備とその現地指導者や日本の利益につながらない環境問題などを研究する設備を残していっていることを伝えていくべきである、と思った。日本の援助に求められるものに、物やお金以外のものが言われるようになっているが、それは人であり、もう１つ研究資料の蓄積も重要な援助であると感じた。日本の人々は、早急に結果を求め過ぎるところがあり、一般の人々に日本の援助が行き届いていないとの批判もあるが、現地の国民性や経済状態などの問題点などを理解しておこなう必要性があり、現在のＮＧＯがそのような点についても十分配慮しておこなわれていることが、今回の研修旅行でよく分かった。

３．国際協力と国際理解について

我々は、国際協力と国際援助をどのように区別しているのであろうか。私の中でもあまり大きな区分はなかった。しかし、今回の研修旅行の中で協力隊員の人達との話しの中では、「援助の感覚ではやはり輪の中に入って行きがたいものがあります。」「してあげている。そんな気持ちがあると嫌われてしまい、できることもできなくなってしまいます。」「とけ込むことが大切です。仲良くすること、それがうまく伝える唯一の方法です。」との内容の言葉が多くかえってきた。援助しても、その機材やお金を使うのは人間であることを一番に考えていく必要があるようでした。また、今回の研修旅行の中で国際理解について、言葉の重要性を強く感じました。万国に共通性の強い英語の大切さと同様に、現地の言語を少しでも使っていく努力は常になされるべきであると感じた。タイ語は、発音が難しいとのことであまり多くの言葉の勉強はしていかなかったが、10日間を過ごすにつれてタイの人々の人間性の良さを感じ、タイ語の少しも話せないことに無念さを強く感じた。英語では、お互いに通じないギャップが大きく、英語と現地語のミックスが少しでもできればどれほど話が進むことであろうかと思った。そして国際協力には何と言っても、いろんな現地に行ってみることであると思う。今回の研修旅行でも、その国には独特の匂いや雰囲気があり、写真や話からでは伝わらない多くのものがある。世界には、我々日本人に理解し難いことも多いが、現地に行って見るとどことなく分かるような気になってくるものがある。そうした点からも、多くの人々に海外研修のできる機会がもっともっと増えることを希望しているし、個人的にも積極的に海外

研修へ出て行ってみることが国際理解に欠くことのできないことであると思う。青年海外協力隊は、システムなどからしても国際協力と国際理解の両面に役立つものであり、教員自ら取り組んでも良い内容ではなかろうか。このような知識や技術を持っている人は、この様な協力ができますといったような内容を具体的に要請していったらどうでしょうか。協力態勢のできやすい地方公務員をターゲットにもっと協力を具体的にやっていくと、やってみたいと思っている人達はもっと多くいると思います。

最後に

今回の研修旅行日程についての注文を１点のみ述べてみたいと思います。

全体的には申し分のない研修旅行でした。ガイドの方も、同行の職員の方も、現地職員の方も、詳しく丁寧な説明で親切でした。

ＪＩＣＡの施設を中心に研修したわけですが、タイの現状を知ったうえでないと、その施設が何のためにあるのか、なぜあるのかが理解できにくい面もありバンコク市内の観光ではなく、巡検的な内容があると良かった。環境問題関係などでは、チャオプラヤ川の逆流のようすや排水設備・工場排水など、その援助施設が造られた理由があったはずであり、そのような市内巡検があったら良かったと思いました。

氏　　名　　和　田　良　治
所属学校　　鹿児島県立末吉高等学校
担当教科　　農　　業

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

学校教育における国際理解や国際協力の実態は、教科指導・生活指導中心の現状では、なかなかその指導を進めるのがむずかしい。また、教師も研修の場が少なく、指導の重要性は感じているが研修不足により指導目標が定めにくい現実にあった。

そこで、今回の平成5年度高校教師海外研修では、同じアジアの中にある、タイ国の一般の人々の生活実態、生活環境、特に農村部における経済的部分や農作業形態、そのなかでも水稲栽培の実態、各種フルーツ栽培等に深く興味関心があり、現実を見ることが主目的であった。

それは、わが国が経済的に恵まれた中でいかに贅沢をしており、消費は美徳と考えている部分を若者達（生徒）に指導し、いつの日か、わが国もかつてそうであった、後進国とよばれている国々と同じような生活状況になってしまうかもしれない訳で、そのときにどのように対応するか考えられる指導法はないものかと考えていた。

また、わが国のタイ国農村における技術協力の実態等が理解できればと思い研修参加した。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　参考になったこと

国際協力については認識不足もあり、今回の研修で大変有意義な研修ができたが、特に技術協力と無償資金協力に大別できる。

技術協力では、専門家のハイレベルでの研究開発から協力隊員による具体的現場での協力まで巾広く実施されていることが理解できた。

また、資金面においても研究施設や器具・備品等あらゆる設備の充実がなされており、大切な部分であることが理解できた。

(2) 疑問に思ったこと

今回の研修では、特別に思ったことはなかった。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

都市部中心の研修であり、視察場所も研究所や大学等の進んだ部分が大半であったので途上国の印象が薄かった感があるが、バンコク市内の人々の生活に大差があり、超高級ホテルやマンションのすぐ横にスラムの生活があり、観光客の足元に小さな幼児が付きまとう様は、やはり、日本とは違うものを感じた。特に学校教育の実状が、生徒数に対する設備不足を強く感じ、進学率の低さもだが、義務教育すら受けられない子供達もたくさんいるのが現状のようであり、経済力の差を日本と比較して強く感じた。

また、交通面では、都心部と周辺部を結ぶ連絡網が自動車一辺倒で特に朝夕の混雑ぶりは大変なものであった。これからの整備が急務の所である。

援助は、ＯＤＡ（政府開発援助）世界一位の日本が中心となり、資金・技術協力を実施しておりタイ国では、専門家167名、協力隊員38名の各氏が現在活躍されていた。資金面では無償資金協力で平成３年度約60億円近くの額が援助されていた。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

国際理解教育を進めるなかで、先進国は後進国に対して何を援助すれば良いのか、先端技術ばかりを指導しても意味のないことも多いとしたＪＩＣＡタイ事務所長の話のなかにもあったように、ギャップがあまりにも大きすぎることが研修を進めるなかで理解できた。

今後、教育指導の活用部分として、生徒に対して具体的資金面や技術的指導も当然大切なことであるが、もっと国際理解に目を向けて、世界に多くの人がおり、いろいろの考え方があり、生き方がある。そのなかの一人として自分があることを指導して生きたい。また、青年海外協力隊への参加について興味関心のある生徒にはどしどし進めて行きたい。

特別活動としてクラブ活動の海外研究班の活動をより活発なものにして行くために今回の研修を生かしたいと考える。

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

今回は、夏休み後半で帰国後体調を崩し、2学期初めにむりがあった。できれば8月上旬がよい。期間的には適当であった。

(2) 研修日程および訪問先

計画変更はしかたなかったが、やはりネパール行きが流れたことは残念であった。

担当教科（農業）上、農村部における生活様式や形態が具体的にみることができず、やや不満も残った。

(3) その他全般的な所感

お二人のＪＩＣＡ・ＪＩＣＥからの同伴者にたいして心よりお礼を申し上げたい。

以上

南米班（ブラジル）日程

月　日	日程		宿泊ホテル名
	午　　前	午　　後	
7.24(土)		19:00 成田発	機　　中
7.25(日)	05:50 サンパウロ着 11:45 サンパウロ発	14:40 マナウス着 視察打ち合わせ	トロピカル・ホテル
7.26(月)	09:00 アマゾン川視察	アマゾン川視察 現地住民と交流	同　　上
7.27(火)	09:00 マナウス市内視察 オペラ劇場、水族館、インデオ博物館、動物園等	15:45 マナウス発 20:40 サンパウロ着	フジ・パラセ・ホテル
7.28(水)	09:30 JICAサンパウロ事務所表敬訪問 10:30 サンパウロ大学キャンパス、プタンタン毒蛇研究所視察	14:30 松柏学園訪問 16:30 移民資料館視察	同　　上
7.29(木)	10:30 モジダス・クルーゼス市近郊 芳賀農場（蘭栽培）視察 12:00 芳賀農場家族と懇親会	16:00 サンパウロ・SENAIプロジェクトサイト視察 18:00 サンパウロ支部日本語学校生徒、専門家と懇親会	同　　上
7.30(金)	10:00 サンパウロ市内視察	14:00 サンパウロ発 15:00 リオ・デ・ジャネイロ着 17:00 リオ支所表敬訪問 18:00 リオ支所、開発青年と懇親	ホテル・ノーボ・ムンド
7.31(土)	10:00 リオ市内視察 コルコバードの丘、ボン・デ・アスーカル　ショッピングセンター視察	21:30 リオ・デ・ジャネイロ発	機　　中
8. 1(日)	機　中	機　中	機　　中
8. 2(月)	機　中	13:30 成田着	

氏　　名　　幸　田　雅　夫
所属学校　　玉川聖学院高等学校
担当教科　　社会（地理）

１．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

① アマゾン川の活用とそこの住民たちの生活について

② 日系の移民人達の活躍、日本語学校について

③ ＪＩＣＡのプロジェクトについて（ＳＥＮＡＩ）

２．協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

国際協力事業団の前身の中心的な事業として行われていた、コチア青年の農業移民として1964年に移民した芳賀さんのところを７月29日に見学した。サンパウロからおよそ１時間半あまりのところで、幹線の道路まで芳賀さんが迎えに来てくださった。2000人くらいが入植をして野菜作りや花卉作りに精を出している。それまでブラジルでは、あまり野菜や果物を食べる人が多くいなかったが、健康食品の見直しなどにより、日本で生産されている野菜が栽培され、また、ポンカン、ビワ、カキといった果物も栽培されているとのことだった。気候が良いために、日本で作られるものよりも実が大きいそうだ。日本人はまじめに良く働き、現在高い評価をブラジル国内で得ている。また、芳賀さんの農場ではランを育てているが、それが、ブラジル国内の市場だけではなく、近年は日本の市場にも入って来ている。日本との協力を今後も行いたいと、抱負を述べておられた。

また、日本からブラジルへＪＩＣＡの専門家が派遣されているＳＥＮＡＩ（職業訓練学校）では日本でもあまり使われていない先端技術が指導されていた。現地でこの学校に入学するのは大変な試験にもちろん合格をしなくては入れない。技術を教えるだけでなく、人間としての教育に力を注いでいることを強調されていた。最新鋭のコンピューターを使った機械も人間教育を無視しては何にもならない。また、リーダーとなる人材を育成するために、いろいろな工夫を試みていた。95年には専門家が帰国しブラジルの方だけで

運営を行うそうだ。

(2) 疑問に思ったこと

地下資源をはじめ、裕福な国なのであるが、町の中には、ストリート・チルドレンをはじめ、貧困階層がみられる。「貧困」から脱出をしようとしているのであるが、経済の不安定、また、富の分配などの問題から進んでいないように思える。

超インフレ国ではあるが、国の経済政策に市民があきらめつつあること。

3．途上国の実状および途上国援助に関する感想について

ブラジルは無償資金協力の対象国からは除外されている。途上国とはいえ経済的に発展している。ＧＮＰ世界第10位という経済力をもっているが、途上国最大の対外債務を抱えている。１日のインフレ率が１％、１ヵ月が30％、１年間が1000％という数字で分かるように、大変な状況である。計算機やコンピューターでの処理で、桁が入らなくなっている。わたしたちが帰国するときにデノミがあったが、10年間に12桁切り下げがあった。

途上国といっても、サンパウロやリオデジャネイロのような大都市では、東京をはじめとする先進国の都市と変わらない。ビルの数も多いし、道路などはむしろ日本よりよいかもしれない。しかし、同じ都市でもマナウスのようなところとでは生活自体あまりにも違い過ぎる。日本の都市と農村の生活の違い以上に、自然とともに悠久に暮らす人たちと都会の雑踏の中で暮らす人とでは生活に差があり過ぎる。しかし、田舎に暮らしている人たちの生活の中にも都会の生活用具が入って来ている。テレビやラジカセは今や水上生活者である「カボックロ」の人たちの中に入り込んでいる。物質が豊かになれば当然のことながら現金収入が必要となってくる。その収入を得るための生活手段としての何かが必要ではないかと思った。牛を追って、マンジョウカ芋を作り生活をしているだけでは、この世の中から置いてきぼりになっていってしまう。文化的な生活を取るか、彼らの伝統文化を失わずして援助をするかが問題となろう。企業が進出して行くことにより、先住民の土地が、生活が変化していくことは間違いない。

4．今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

アマゾン川については、その大きさ、水かさなど、口で説明をするよりは、取って来たビデオを見せた方がはるかに効果的である。

日系人にしても、身近な問題で、「外国人労働者」のことに触れるならば、日系人を切り離すことはできない。現在15万人以上も日本に来ている。

5．所感および意見

(1) 研修時期および期間

長期の研修ができるのは、夏休みである。研修会などが重なることが多いが、それはやむを得ない。熱帯の国であれば、冬でもかまわないと思う。

(2) 研修日程および訪問先

ブラジルの研修を行うにはこの日程では少々不足である。往復の日程でだいぶ取られてしまうし、ハードであった。学ぶ内容はかなりたくさんあった。訪問先で、もう少しゆっくりと話などできればと思った。

(3) その他全般的な所感

海外研修の良さは、現地の人の生活と接触することだ。現地の人と同じような生活をすることは難しいかもしれないが、ホームステイなどができれば、なお、有意義に過ごせるようにも思う。治安が悪いために、町を歩くわけにはいかなかった。現地の人も「治安が悪い」ことを嘆いておられた。実際わたしたちが出掛けていたときも、いくつかの悲報が紙面に出ていた。日本の町を歩くのとはちょっと違う犯罪の多さである。逆に日本のように治安がしっかりしているほうが例外的なのかもしれない。

病人がでなかったこと。旅行では健康が何よりだ。特に、海外となると水が合わなかったり、食事が合わなかったりすることがある。今回の同行の皆さんは、順応性が高く、最後まで、意欲的に研修に励まれ、啓蒙された部分が多かった。

氏　　名　　木　村　泰　男
所属学校　　滋賀県立水口高等学校
担当教科　　社会（地理）

１．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

私は専門教科が地理ということもあって、今回のブラジル研修には多大な期待を持って参加させていただきました。特に興味・関心を持っていたことは次のような点でした。

(1)　ＪＩＣＡの果たす役割……技術協力の現状、ＪＩＣＡ派遣の専門家・青年海外協力隊員の活躍、移住者とＪＩＣＡの関係

(2)　日系移民の現状……日系人が大量に日本に出稼ぎに来られる背景、日系人のブラジルにおける活躍とその地位

(3)　ブラジルの国情について……政治・経済・市民生活などがどうなっているか

(4)　アマゾンの自然と生活……マナウスとその近郊におけるアマゾン川・セルバの自然と、そこに展開する現地の人々の生活

２．協力活動現場の視察を通して

今や経済力世界一となった日本のＯＤＡや、不幸にもテロ襲撃や航空機事故によって世界の各地で活躍しておられることが広く社会に知れ渡ることになったＪＩＣＡの活動など、我が国が発展途上国で行っている様々な国際協力・開発援助が国内外から注目されるようになった。しかし実際には、国際協力の実態、ＯＤＡの中身やＪＩＣＡとの関係など具体的な事となると、ほとんど理解されていないのが実態である。例えば、「高校地理」や「政治・経済」の中の国際協力や開発援助に関する単元では、ＯＤＡの支出額が世界一になろうとしていることや日本のＯＤＡが贈与より貸与の比率が多い点、対ＧＮＰ比の支出額ではまだまだ少ない点等の問題点が中心となることから、結果的には日本の経済力の凄さのみが浮き彫りにされ、発展途上国の状況や援助の実態について

はほとんど触れられないままに済まされていることが多い。

さて、今回の研修ではこうした点について、次のような事を学ぶことができた。

① アマゾン川中流の中心都市マナウスへの企業の進出とセルバの環境問題

自然の宝庫アマゾン、その中央に位置する「陸の孤島マナウス」は自由貿易地域の工業・流通都市として発達し、真新しい工業団地には350社以上が建設され、多数の日系企業も進出している。こうした不便な地が工業・流通都市として発達した要因は、アマゾン一帯の地域開発のため政府がこの地域にのみ工業生産に優遇税制を適用し、高関税などの保護貿易政策を行っていることによるものである。政府の保護政策は、相当不利な立地条件をも克服するということが理解できた。

一方、セルバにおける森林伐採（焼畑農業や木材開発、特に政府援助による大規模牧場開発）による森林破壊は地球規模の環境問題としてクローズアップされてきた。しかし、環境破壊としての開発を問題視しているのは日本を含む先進国であって、貧困に喘ぐブラジル国民からすればアマゾンの開発や豊かな生活への願望は当然のものとも言える。ここに地球規模の環境問題の難しさを改めて考えさせられた。ただ、サンパウロからマナウスまでの機上からの景観や、カヌーによるアマゾンクルーズの実感からは、その密林の広大さと森林密度の濃さは人間の力の及ぶ範囲外のように思われたのだが。

② 芳賀農場における花卉栽培と日系人の活躍

芳賀氏は35年前宮城県より移民開拓青年としてイタペチに入植、野菜栽培から花卉栽培へと転換、セントポーリア・デンドロビューム（蘭）などをブラジルで最初に手がけ、成功に導いた中心人物である。市場価格も芳賀氏自らが出荷時に決定されているとのこと。気候に恵まれていることや生産コストが非常に安いこと、そして季節が逆であることもあって日本への輸出も増大しつつある。近くにお住まいの生田氏は日系二世で、先頃までサンパウロの農業大学の教授をされており、現在も農事試験場で野菜栽培を中心とする研究と普及活動に当たっておられる。胡椒やジュート栽培の導入、野菜栽培の改良・普及と食生活への導入などを始められた日系人をはじめ、このお二人のように、ブラジルで活躍し貢献してこられた日系移民の方々はたくさんおられ、今やブラジル経済界における日系人の比重は大きなものとなった。こ

うした活躍と貢献が国際協力の重要な役割を担っていることも忘れてはならない。一方、開拓移住の方々の物心両面にわたる指導、援助を行ってきたのがＪＩＣＡである。衰退した経済の中で苦労を強いられている方々が多数存在する現在、より強力なＪＩＣＡからの支援体制やフォローアップが、ブラジル発展のために貢献してこられた日系人の方々への礼であり、ブラジルへの国際協力となるのではないだろうか。

③　ＳＥＮＡＩ／ＳＰ製造オートメーションセンター（職業訓練校）とＪＩＣＡ

ブラジル産業界が必要としている品質管理技術、生産の自動化技術などの先端分野における専門家養成のためにＪＩＣＡがＯＤＡ技術センターとしてサンパウロ市内で行っている事業を見学した。このプロジェクトは1990年から1995年までの５年間に、約６億円相当の最先端機材の供与と日本人専門家の派遣（現在７名）、さらに指導員の日本語研修をＪＩＣＡが負担し、施設等はブラジル政府が負担して行われているものである。ＪＩＣＡから派遣された専門家は直接訓練生を担当するのではなく、現地指導員に技術指導することによってプロジェクト終了後の技術移転に備えている。チームリーダーである花田氏からは、こうした国際協力で最も大切な点は「技術協力」よりも「人間同士のふれあい」であり、国際人とか国際性を持つ人というのは、外国へ行くことや語学が堪能であることだけではなく、「すぐれた人間性を持つ人」「立派な日本人である」ことにあり、国際教育とはこうした人間性を育てることであるということを学んだ。

④　日本人学校「松柏学園」で考えさせられたこと

松柏学園は、市内にある川村園長の自宅を開放して営まれている日本人学校である。５歳から22歳までの250名程の生徒が、８部に分れて学んでおり、10畳ほどの部屋に40名程の生徒と先生が入り、上級生は立って学んでいるそうである。川村園長のお話から、私たちが忘れかけている教育の柱である「人間教育の大切さ」を学ぶとともに、私たちのために冬休み中にもかかわらず登校してくれた生徒達や先生方からは、日本語を通じて「日本人の心と文化」を学んでいることをうかがい知ることができた。サンパウロの一般学校における暴力や麻薬などの非行の現実は厳しく、日系人の生徒達にも大きな影響を与えているだけに、「日本の精神」を通した人間教育を充実させたいと意気込んでおられるその姿に感銘をうけた。振り返って自らの教育と教

育現場を考えるとき、あまりに教育の柱や主張のなさに自己嫌悪と幻滅感にさいなまれる思いである。

3. ブラジルの実状とその感想

ブラジルの政治・経済・社会情勢については日本国内にいても時折マスコミを賑わせているが、ほんの10日間足らずの滞在中にもさまざまなことを見聞きすることができた。次にその幾つかについて感じたことを列記してみたい。

① なぜ日系人の人々が多数日本に出稼ぎにくるのか

花卉栽培で成功された芳賀さんは、ブラジルの自然は豊かで多くのものを与えてくれるとおっしゃった。確かに野菜も果物もすこぶる大きくて味もよく、そんな豊かな農場を経営している日系人も多い。しかし、強烈なインフレや対外債務No.1の経済は、一部の富裕層をのぞいて生活を豊かでなくしてしまった。そんな折、かつて貧困国家日本に見切りをつけ、夢をブラジルに馳せ移民された人々の前に、祖国日本は世界一の金満大国となって現れ、10倍以上とも言われる賃金格差や日本の労働力不足にともなう日系三世までの労働ビザの許可は、13万人もの出稼ぎ者を生んだ。しかし、私の周辺におられる日系人の人々からは、母国はブラジルであって、異国日本は決して住みよい所とは思っておられないように感じられる。

② 治安の悪さ

出発前よりブラジルの治安の悪さは聞いていた。しかし、アメリカだって一人で歩けないような所もあり、ヨーロッパだって物はよく盗まれる。ＪＩＣＡの皆さんが、日本の治安の良さに慣れきっている私たちに、もしものことがあってはならないと気を使って言っておられるのだろう位に思っていた。幸い研修中には何の事件も起こらなかったが大変な状況のようだ。これもブラジル社会が持つ圧倒的多数の貧困層と、300万丁ともいわれるピストルの存在が生むのだろう。確かに車窓にみられるファベーラ（貧民街）を何とかしなければ治安はよくならないだろう。

③ 強烈なインフレ

この20年ほどの日本国内におけるインフレは、最大でも年10％前後、最近では２～３％以内ではないか。ところがブラジルでは日に１％、月30％、年1000％以上だという。ちなみに昨年の８月28日は１$＝5200クルゼーロ（Cr$）

今年の3月26日は27,000Cr$、5月27日が52,000Cr$(9ヵ月で10倍)、そして滞在中の7月27日には何と73,500Cr$にまでなった。7月30日の新聞には、この10年間で3度目のデノミが8月1日より実施されることが発表されていた。このデノミによって下3桁が切り捨てられ1,000Cr$=1クルゼーロレアール(CR$)になるそうである。しかし、小切手が一般的に用いられていることや、インフレやデノミに慣れているせいか大して気にしている様子はない。とにかく、最大紙幣が50万Cr$であったり、1万円の買い物をすると700万Cr$も払うことや、やたら札が増えたり、電卓の桁が足りなかったり、桁数が多すぎて読み間違いをしたりで大変であった。

④ アマゾンの自然

とにかく凄いの一語につきる。セルバは陸の大洋で、アマゾン川は大海流と言えるだろう。こんな自然をも人間が変えてしまうならば、地球の命はそう長くはない。

4. 最後に

「せっかくの地球の裏側、もう少し時間的余裕があったらなぁ」という贅沢な思いが残る素晴らしい研修でした。この研修中に撮影した5時間分のビデオを編集し教材化する仕事と、県高国協機関紙への投稿など、まだまだこの研修のまとめには時間が掛かりそうです。最後に、大変御世話になったＪＩＣＡ関西支部の藤原氏、団長で豪快な吉田校長先生、世界中を回っておられる行動派の幸田先生、そして高校生とは思えない程しっかりした阿部・小熊の二人の女生徒に感謝するとともに、こうした機会を与えて下さった県高国協とＪＩＣＡの皆様に心よりお礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

氏　　名　　吉　田　富　夫
所属学校　　奈良県立片桐高等学校
担当教科　　英語（校長）

1．今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

奈良県に於いてもブラジルからの研修生が数多く来県し、医学・農業・工業技術等色んな分野で研修の実を上げている。また、本校にもロータリークラブ推薦による長期留学生が滞在しており、ＪＩＣＡ他の機関を通してのブラジルと我が国の関係がより身近なものになってきている。

ブラジルと日本の関係は「日伯修好通商条約」に始まりその後の1908年笠戸丸がサントス港に着いた６月18日から現在に至るほぼ１世紀に渡る長く深い関係を保っている。この間、日本からの移民の苦労と努力、正直と勤勉さが日系人のブラジルに於ける確固たる地位と信頼を築いてきたが、一方では現在一部日系子弟が経済不安のために生活に困窮し、日本への出稼ぎを余儀なくされている状況にある。そこで、130万の同胞が生活をしているブラジルの国情や日系人の生活、そして、それに関わっているＪＩＣＡの活動について研修を深めるため参加した。

2．協力活動現場の視察を通して

(1)　アマゾン河視察

アマゾンの広大さは筆舌につくせないと言われているが、まさにその通りであって、サンパウロ空港からマナウス空港への機中から見たアマゾンは、不可侵と神秘の極みであった。マナウス港から小舟に乗りネグロ河を下り、ソリモンエス河の合流点で見るコーヒー色の水と黄色の水のうねり、更に両者相変らず流れ下る姿は壮観であり、時に舞上がるピンクやグレイのイルカが感動的であった。

ソリモンエス河を逆上り、河辺に点在する脚柱の高い家々（雨季に備えるため）とそこに住む現地の人々を見る。昼食に立ち寄ったカボックロの家にはバッテリーによるテレビ・扇風機はあるものの、特にこれといった家具はなく、極めて質素な家であったが案内人の話ではテレビがあるのは極めてま

れで、ほとんどは何も持たない家が多いそうである。しかし、大自然の中でマンジョーカを栽培し、必要なだけの魚を取って暮らしている土地の人々の生活がいかにも優雅で時間がゆったりと流れている感じがしたのは文明社会に住む者の傲慢さ故であろうか。アマゾンの中には、未だ接触だになされていないインディオが住んでいる可能性があるとも言われているが、現在開発が進行しつつあり（大カラジャス計画、ポロノエステ計画、ポラマゾニア計画、北部国境計画等）、また、更に推進されるであろう開発と自然保護、現地住民の生活権の問題等文明が与える多くの課題が山積しているようである。

(2) ＪＩＣＡサンパウロ事務所訪問

第２次世界大戦後に於ける邦人海外移住事業の実施機関として設立され移住に関する業務と技術協力に関する業務を行っている。サンパウロには、日本人移住者が最も多く、移住に関する調査・情報収集・移住者の受け入れ援助・農業融資等々で非常に多忙な様子であるが、特に技術部門に於いて同州がブラジル経済産業の中心地及び同学術・技術研究機関の本拠地として、技術移転に対する需要が高く、技術吸収・受け入れ能力も高いことからブラジル国からの要請とも相まって同国に対する協力事業が極めて円滑・効率的に行われているようである。しかし、移住部門の農業地帯に於いては近年の不況による「出稼ぎ」により一部過疎化現象も発生していることと、出稼ぎ者の日本に於ける就職斡旋、生活適応訓練等これまでになかった問題もあるとのことで、聞く者の胸が痛んだ。

(3) ＳＥＮＡＩプロジェクトサイト見学

上記ＪＩＣＡの技術協力の一大事業としてＳＥＮＡＩ／ＳＰ製造オートメーションセンタープロジェクトがある。1986年ブラジル政府より協力要請があり諸調査、日本人専門家の選定を経て1992年にオープンした研修所である。現地の事業所及び高校生や一般から募集し、約６倍の難関を突破した者がこの研修所で２年単位で研修をする。ここでは高度な機器（ＦＮＳ等）を取り入れ、特に指導者養成に力を入れると共にブラジルと日本の交流にも力を注いでいる。このプロジェクトでは日本が援助するというおこがましさでなく、戦後日本が助けられた事実に基づく責務としてこの事業を行っているということである。そして、共に考える人、一人歩きできる人間を育てることに重点をおいている教育方針に共感を覚えた。

(4) ＨＡＧＡ農場訪問

モジ郡イタペチにある農場主芳賀七郎氏はコチア青年第一期生としてブラジルに渡った人である。郷里は宮城県本吉郡。戦後の疲弊した日本農業の次男以下の生きる道としてブラジル行きを決意され昭和32年に渡伯、日本人パトロンの所で３年働き独立、農業、主として野菜作りをされていたが、地理的条件とこれからの農業経営の先行きを考え、現在はラン作りをされている。ラン作りはブラジルでは先行的なもので、言わば独占企業として、売価も現在では独自に付けることができる。名古屋に姉妹提携を持ち、技術指導、輸出についても進行中とか。どの世界でもそうであるが、人がやる前に自分でやることが経営の極意と力説されていたが、コチア青年として渡伯し、苦労を重ねて来られた故の工夫であり努力が現在の地位を築いておられることを話の裏から強くうかがえ感動したものであった。また、日本の若者に、狭い日本で生きるだけでなく、広い世界に出て自己の力量を発揮することを指導してやってほしいと力説されていた。

(5) 松柏学園訪問

ブラジルは各校午前・午後の２部制であるため、その逆の時間帯に日本人子弟を中心に日本語学校を開校している。５歳から22歳までの４部制180名の生徒の指導が、川村万里子園長（二世）を中心に展開されている。学校は少し大き目の普通の家屋で、26名定員の一教室がそれに当てられ、生徒の幾人かは立ったまま授業を受ける場合もあるが皆熱心である。場合によっては応接間等が教室に早変わりすることもあるが、生徒、保護者共、信頼関係の中で円滑に学校経営がなされている。教科書は日本のＴ出版社を用いているが、学園の二世、三世教師により開発された指導法により、現地生徒に適合するようアレンジして活用されている。ブラジルでは制服を持たないが、この学園には校章、制服があり、生徒達は極めて礼儀正しく、すばらしい日本語を話す。この学校の目的は日本語の読み書きと、日本語による意志表示が自由に出来ることと共に日本文化を理解し、ブラジル国の向上と地球上の平和の確立に貢献できるブラジル人の育成、更には道徳教育にも力を入れ、知・情意の発達した円満な人格養成に努めておられる。特に、最近のブラジルの治安の悪さと子供達の礼儀作法の無さに心を痛め、この学園では、古来の日本の礼儀作法、長幼の序、言葉遣い等に重点をおき、茶華道部、礼儀作法部の

活躍に期待されている面が多いことを知り、日本で失われつつあるものがブラジルに残っている感を強く持った。

(6) 移民史料館見学

サンパウロ市文協ビルにあるブラジル日本移民史料館は、日本のブラジル移民が残した日系人のほぼ1世紀にわたる歴史とその子孫達のビジョンを表すものである。

当初のコロノ移民の言語に対する苦労のあとの独立農への軌跡と、その中でも日本文化を継承し、子弟の教育に力を注いでいる姿。勤勉と工夫により、奥地農業、近郊型農業、熱帯農業のそれぞれにこれまでブラジルに無かった品種と栽培方法により現在のブラジル農産物の多種多量化に貢献し、日系人のブラジルに於ける地位を確固たるものにしてきた力強い足跡を見ることができた。

(7) ブタンタン毒蛇研究所見学

500平方米の緑豊かな高台の敷地にあるサンパウロ州立大学の近くの木立ちに囲まれた丘の上にあるこの研究所は、毒蛇、毒ぐも、サソリ等の有害生物に対するワクチンの研究で世界的に有名な所である。屋外にある蛇園では、ブラジル全土から集められた蛇が飼われ、生態を観察することが出来るし、付属の博物館では毒蛇や毒虫400種4万匹が収集されている他、蛇の皮や骨採集用具の展示もあり、興味深いものであった。

(8) リオデジャネイロ支所訪問

事業内容についてはサンパウロ事務所と変わらないが、ここでは特に治安についての説明があった。リオに於ける治安状態は最近非常に悪化しており、夜の外出は複数であっても安心できないとのことである。我々が出発する数日前にも、教会の前で子供が7～8名射殺されたニュースがあり、その現場にも行ったが、犯人は警官ではないかという信じられない話がある。偽警官の出没(車を止め金品強奪)、強盗、殺害、誘拐、汚職腐敗等あらゆる犯罪が今リオを中心に広がっているとのことである。夜は静かにホテルにいる他はないという状況である。

3. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

ＪＩＣＡの活動について日ごろ一般市民の触れる情報は、コロンビアやネパー

ル、あるいはペルーでの悲しい知らせのみで、ＪＩＣＡが世界各地で果たしている活動や成果について知る機会が少ない。ＪＩＣＡの活動の真の中味と日本が世界の国々に果たすべき役割を伝え、考えさせ、行動させたいと考えている。そのため、今回参加して知り得たＪＩＣＡの活動とそこに働く人々の姿を講話や文化祭の展示等で生徒に伝達したいと考えている。

４．所感および意見

研修時期は最適であったが、特にブラジルは移動のための時間が多く、１研修場所でゆっくり見学や懇談が出来ないことが多かったので残念だった。特に協力隊員と話し合う場が無かったことが心残りである。しかし、この度の研修で、コチア青年がブラジルに広大な根を張り、自信と誇りを持って生きておられる姿に感動したし、多くのブラジル在住の方々が日本国と日本の若者に大いなる期待をかけておられることに胸が熱くなるのを覚えた。また移住者や技術指導に於けるＪＩＣＡの活動の生の姿を見せていただく良い研修であった。

ブラジルは先にも書いた通り１世紀に近い国と国、人と人との交わりをしている国であるが故に、現在のブラジルのかかえる諸問題が決して他人事でなく、とくに経済と治安の安定を心から願うものである。

2．参加者氏名

【インドネシア班】

	氏　　名	所属学校・住所	担当教科
1	樋口良弘	北海道旭川農業高等学校 北海道旭川市永山町14−153	農　業
2	岩山政則	青森県立五所川原工業高等学校 青森県五所川原市大字湊字船越192	電気工学
3	千葉祐悦	岩手県立岩谷堂農林高等学校 岩手県江刺市岩谷堂字根岸116	農　業 （農業土木）
4	青木美紀	山形県立米沢工業高等学校 山形県米沢市丸の内1−2−68	英　語
5	石塚裕之	埼玉県立杉戸農業高等学校 埼玉県北葛飾郡杉戸町堤根1684−1	英　語
6	遠藤　晋	神奈川県立商工高等学校 神奈川県横浜市保土ヶ谷区今井町743	工　業 （電気）
7	内山二男	新潟県立興農館高等学校 新潟県西蒲原郡巻町大字巻甲12007	農　業
8	新古達也	石川県立富来高等学校 石川県羽咋郡富来町領家町ハ−1	英　語
9	小原洋美	福井県立足羽高等学校 福井県福井市杉谷町44	社　会 （地理／現代社会）
10	熱田幸嗣	三重県立明野高等学校 三重県度会郡小俣町明野1481	数学／英語
11	談儀善弘	和歌山県立田辺工業高等学校 和歌山県田辺市あけぼの51−5	数　学
12	飯島睦美	島根県立江津工業高等学校 島根県江津市江津町1477	英　語

	氏　　名	所属学校・住所	担当教科
13	水　本　正　人	愛媛県立大洲農業高等学校 愛媛県大洲市東大洲１５	数　　学
14	西　森　茂　雄	高知県立高知農業高等学校 高知県南国市東崎９５７－１	農　　業
15	城　　英　巳	福岡県立門司高等学校 福岡県北九州市門司区丸山３－１－１	芸　　術 （美術）
16	權　藤　洋　文	佐賀県立佐賀農業高等学校 佐賀県杵島郡白石町福田１６６０	社　　会
17	中　村　裕　継	宮崎県立佐土原高等学校 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下田島２１５６７	工　　業 （電子機械）
18	稲　嶺　英　一	沖縄県立南部農林高等学校 沖縄県豊見城村字長堂１８２	農　　業

【タイ班】

	氏　　名	所属学校・住所	担当教科
1	千　葉　大　健	宮城県立仙台東高等学校 宮城県仙台市若林区下飯田字高野東７０	社　　会
2	佐　藤　勇　一	秋田県立能代北高等学校 秋田県能代市追分町１－３６	英　　語
3	多　田　裕　志	聖光学院高等学校 福島県伊達郡伊達町字六角３	宗　　教
4	宮　島　　誠	茨城県立藤代高等学校 茨城県北相馬郡藤代町大字気有６４０	英　　語
5	天　海　玲　子	栃木県立栃木南高等学校 栃木県下都賀郡大平町川連３７０	英　　語
6	浦　部　茂　夫	千葉市立稲毛高等学校 千葉県千葉市美浜区高浜３－１－１	英　　語
7	上　松　信　義	東京都立農産高等学校 東京都葛飾区西亀有１－２８－１	農　　業 （教頭）
8	八　代　四方樹	山梨県立農林高等学校 山梨県中巨摩郡竜王町西八幡４５３３	数　　学
9	北　原　千　歳	長野県立南安曇農業高等学校 長野県南安曇郡豊科町大字豊科４５３７	農　　業
10	小　島　隆　彦	富山県立伏木高等学校 富山県高岡市伏木一宮２－１１－１	国　　語
11	山　内　和　幸	岐阜県立恵那高等学校 岐阜県恵那市大井町１０２３－１	社　　会 （地理）
12	小笠原　鋭　雄	愛知県立岡崎工業高等学校 愛知県岡崎市羽根町字陣場４７	工　　業 （校長）

	氏　　名	所属学校・住所	担当教科
13	奥村　功	京都府立農芸高等学校 京都府船井郡園部町南大谷	英語 （校長）
14	中村和美	大阪府立久米田高等学校 大阪府岸和田市額原町１３	英語
15	中村博行	兵庫県立加古川西高等学校 兵庫県加古川市加古川町本町１１８	社会
16	松本多恵	鳥取県立米子高等学校 鳥取県米子市橋本３０	商業
17	岡野吉男	岡山県立高松農業高等学校 岡山県岡山市高松原古才３３６－２	英語
18	花房千鶴子	広島県立安芸府中高等学校 広島県安芸郡府中町字倉輪多山３７２－１	数学
19	安永　潔	徳島県立勝浦園芸高等学校 徳島県勝浦郡勝浦町久国字屋原１－１	農業
20	宮武裕樹	香川県立琴平高等学校 香川県仲多度郡琴平町１４２－２	英語
21	松尾義嗣	長崎県立佐世保南高等学校 長崎県佐世保市日町字町２５２６	社会 （地理）
22	榊　定信	熊本県立蘇陽高等学校 熊本県阿蘇郡蘇陽町滝上２２３	国語
23	小野伸通	大分県立別府鶴見丘高等学校 大分県別府市大字鶴見字横打４４３３－２	社会
24	和田良治	鹿児島県立末吉高等学校 鹿児島県曽於郡末吉町二之方６０８０	農業

【南米班（ブラジル）】

	氏　　名	所属学校・住所	担当教科
1	幸田雅夫	玉川聖学院高等学校 東京都世田谷区奥沢7－11－22	社会 （地理）
2	木村泰男	滋賀県立水口高等学校 滋賀県甲賀郡水口町梅が丘3－1	社会 （地理）
3	吉田富夫	奈良県立片桐高等学校 奈良県大和郡山市満願寺町60	英語 （校長）

平成5年度（第29次）高校教師海外研修報告書

平成5年12月1日 発行

発行者　国際協力事業団
〒163-04
東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル　私書箱216号
電話 03-3346-5311

© 1993 国際協力事業団　Printed in Japan

この報告書は再生紙を使用しています。

JICA